

上地の風（第九号）

ふるさと上地  
6

岡崎市立上地小学校

上地の風(第九号)

ふるさと上地  
6

岡崎市立上地小学校

## はじめに

本年は、学区・学校創立十周年にあたり、学区並びに関係者の皆様方のご協力により記念諸行事を無事終えることができました。総代会、社会教育委員会を初め各種団体の連携による「ふるさとづくり」の運動の成果によるところ大であります。

過去十年間、学区とPTAと学校が一体となって学区・学校づくりを進めていただきました。このことは、子どもたちが、郷土の歴史・文化・自然を理解することであり、やがて心の支えとなって、将来さらに郷土上地を発展させてくれるものと信じます。

学区と学校をつなぐパイプ役として毎月「学校だより上地」を作成しお送りしておりますが、学区のみなさんからの学校によせる励まし、要望、資料提供も含め、内容は充実し、その絆を一層強めてまいりました。

ここに本年度分を集約して『ふるさと上地第六集』を発行することができました。ご支援頂きました皆様にお礼申し上げます。これをひとつの大切な通過点として捕らえ、さらに新しい一歩を進めたいと思います。今までと変わらぬご支援ご指導を心からお願ひ申し上げます。

平成五年三月

岡崎市立上地小学校長 深津 武司

目次

一、ふるさとシリーズ

- 一、春風を浴びて上地八景めぐり 1
- 二、再発見上地 5
- 三、セーター工場を訪ねて 10
- 四、暮らしを高める施設 21
- 五、上地の農業 25
- 六、国道二四八号線を歩いて 30
- 七、自然のサイクルの中で 38
- 八、奥山田池の水鳥たち 43
- 九、でかけてみませんか冬の大谷公園 48
- 十、千年前の上地古窯跡群<sup>1</sup> 52
- 十一、千年前の上地古窯跡群<sup>2</sup> 61

二、校長通信

- 一、桜と花水木に迎えられて 73
- 二、学校が大切にしていること 75
- 三、よく見て触れてそして仲よく 77
- 四、子供の生活を語る 81
- 五、この秋充実の日々を 83
- 六、学区・学校づくり十年に感謝 85
- 七、育もう思いやりの心 88
- 八、子どもの子どもによる子どものための上地っ子文化祭 90
- 九、とり年を迎えて 92
- 十、学芸会で学んだことは 94

三、教室の窓

- 一、一年生の子供たちとの出会い 97
- 二、小さなおにいさん、おねえさんたち 100
- 三、「もう一人のわたし」の制作より 103

- 四、プールにあふれる笑顔の主人公たち
- 五、性教育
- 六、子供は等しく感じる世界をもっている
- 七、子どもたちが作るおいも祭り
- 八、小さなお店やさんがいっぱい
- 九、オズの魔法使い
- 十、三年生のすすめるクラブはこれだ

138 132 127 121 113 109 106

#### 四、学校ニュース

- 一、九八三名でスタート
- 二、読書月間行事
- 三、ふるさとを知ろう
- 四、交通安全
- 五、修学旅行無事終わる
- 六、おいしい焼きいも
- 七、冷水機のご寄贈

156 155 154 152 148 145 143

- 八、保護者の出身地アンケート
- 九、上地学区交通少年団発足
- 十、ふれあい牧場だより

163 159 157

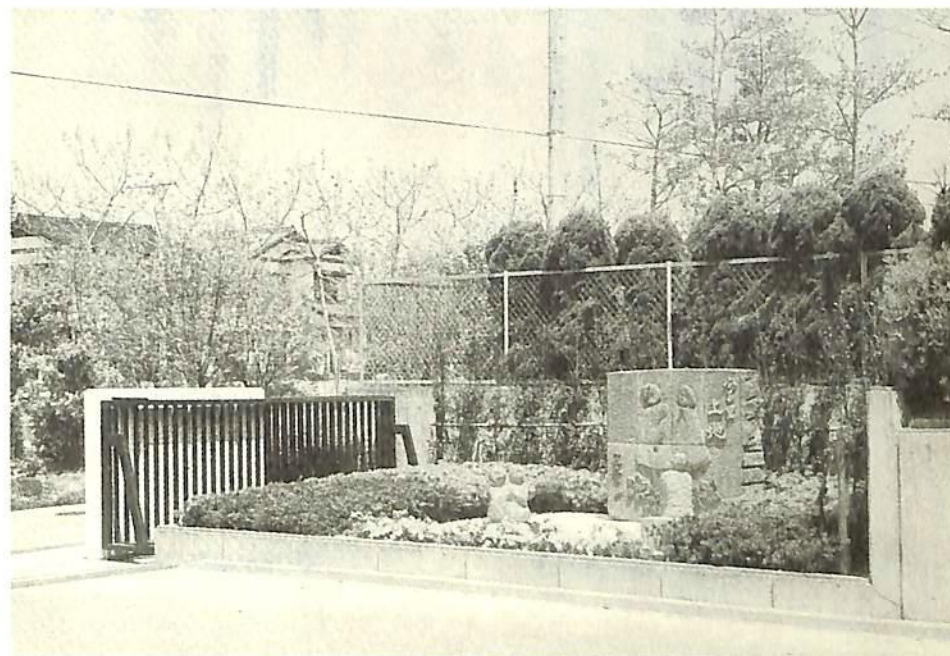
#### 五、寄稿

- 一、上地湿原に私も行ってみた
- 二、カイツブリ
- 三、奥山田池に一面の白い花
- 四、三菱自動車の見学に参加して
- 五、おいでん施設めぐりに参加して

205 203 199 195 193

一、ふるさとシリーズ

新上地八景



2 ふる里上地像

学区・学校創立10周年事業の一環として築造され、全国各地から集まってきた学区民の新たなふる里を象徴している。岡崎の石彫家鈴木政夫氏の作である。像を囲む庭園の美しさは心の安らぎを与えてくれる。

## 春風を浴びて 上地八景めぐり

『上地八景』ってどこにあるんですか？

四月九日木曜日、上地小学校に新しくみえた先生方と上地八景めぐりに出かけました。説明役の講師は、名倉先生と松坂先生です。参加して下さったのは深津校長先生はじめ十九名です。昨年は雨天のため行えませんでした。今日、今日は春風に誘われて出発です。

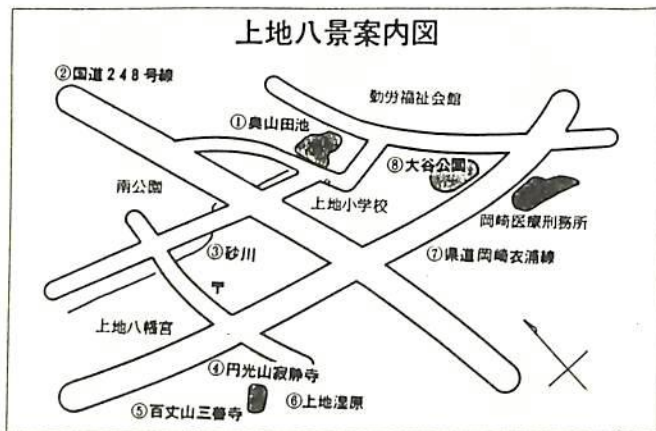
じやくじようじ

### 寂靜寺

二四八号線・衣浦線を経て、まず寂靜寺です。寂靜寺は聖徳太子にゆかりのあるお寺です。

★上地に来て一年がたちましたが、学区の中もあまり見えていないことが良く分かりました。特に寂靜寺と三善寺は全く知らなかっただけに、とても勉強になりました。

(深津)



上地小学校 長坂 信一

### 二 善吉寺

続いて三善寺です。ここは、シイの木などの自然と、伝説にも残っている地藏さんで有名です。住職の鶴森さんは、忙しい中をご本尊の説明や、「だき地藏」の話をして下さいました。ご本尊にお参りしてから、一人一人が願い事となえながら、「だき地藏」を持ち上げてみました。

★寺社の少ない学区ということですが、小豆坂学区には全くありませんでしたが、寂静寺・三善寺があり、何だかほっとしました。三善寺でのお話も気さくで楽しく伺うことができました。 (熊谷)

二週間後には六年二組の子たちが、担任の木村先生とともに訪れて、地域の学習に役立てています。

### 上地湿原

池の周りはすっかり春です。しかし、池を見るとまだカイツブリらしい鳥が見えます。すぐ近くには建築中の



大きなマンションがあります。池の中に入り込んでくる水が気になります。この池の構造上、生活排水は池には入りません。

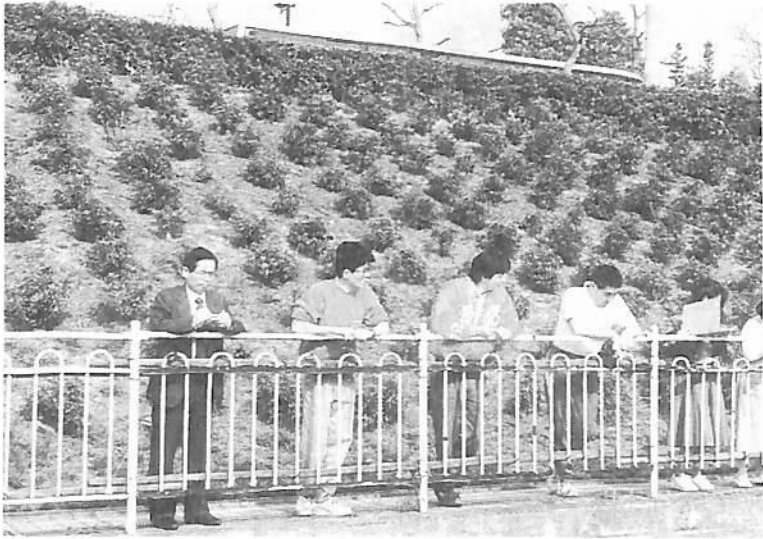
★自然の少ないところだけに残されているものを大切にしていることが、先生の説明から良く分かった。湿原や砂川などをいつまでも美しいままで次の世代に残したいと思った。 (杉田)

### 砂川

奥山田池を水源とする砂川は、正直言ってあまりきれいな川とは言えません。コンクリート堤防のあちこちから生活排水が流れ込んでいるからです。そんな砂川ですが、のぞいてみると大きなコイやフナがずいぶんたくさん泳いでいます。

★区画整理が行われ、宅地が増えても自然に恵まれていると思えました。砂川にコイがいることなどを初めて知りました。大谷公園などこれからの三年生の学習に取り入れたいと思います。 (今枝)

### 奥山田池





桜の季節が終わり、目に若葉というところですか。勤労福祉会館側から池をのぞいてみました。汚れていてつい顔をそむけたような水です。こんな奥山田池ですが、魚類はなかなかの種類がいます。冬になれば、五十羽をこえるかもが見られます。

★美しい自然を、私たちの回りに少しでもたくさん残すために、一人一人が生活排水の出し方ひとつにも意識を持って気を付けることの重要さが目で見て実感することができ、子供たちにもその心を伝えていけたらと思います。

(唯内)

★大谷公園や奥山田池などは子供達と一緒に歩いたり遊びに出かけたりしていて、見慣れた景色だと思っていたのですが、講師の先生に詳しく説明していただけたおかげで、八景をもっと興味深く歩けそうな気がしました。

## 大谷公園

最後に大谷公園です。学校から五分ほどで来れるこの公園は、第二の教室とも言えるほどです。日時計があり、山の上には銅鑼形の展望台があります。また池のほとりにはキャンプ場があり、夏休みには子供会などでよく使われます。

総代さんたちの手で堤防に植えられた桜の木も、花をつけるようになりました。上地学区の将来的な展望からいうと、憩いの園にしたいのだそうです。

★大谷公園や衣浦線などいつも見たり通ったりしているのに知らないことがたくさんありました。(太田)

★近くにこんな場所があったと知り、驚きました。子供達と一緒に探検できたらいいと思います。(寺澤)

★今年三年生担任なので、子供達と学区めぐりを数多く作り、体験を豊かにさせたい。嶋田校長が作られた創作童話がより身近に感じられた。(鈴木)

★学区に、まだ自然が残っていて嬉しい。子供達と時間を作って大谷公園の遊歩道を歩いてみたい(遠山)

## 再発見上地

～さわやかな歩道・馬頭緑道を歩いて～

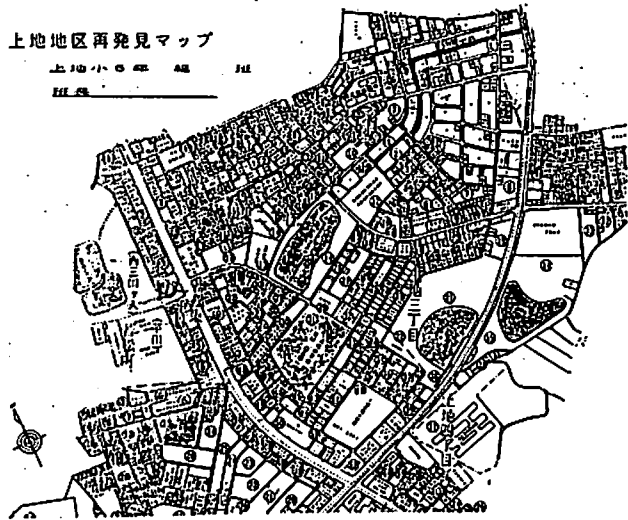
五生担当 松坂 禎文

春のさわやかな日さしの中、子どもたちが楽しみにしていた春の遠足がありました。1年生も小学生になって初めての遠足でとてもうきうきしているようです。春の遠足は、文字通り遠いところへ足を使って歩いていく行事です。それだけに子ども達もどこに行くのか興味津々です。高学年になれば長い距離を歩くだろうと予想をする子が多く、行き先をほとんど先生に聞いています。そんな子どもたちとはうらはらに、5年生では今までとは異なった遠足を計画していました。

## 上地再発見

みなさんは「上地で行くとよいところはどこですか。」と聞かれたら、どこを紹介するでしょうか。すでにいろいろなところで紹介されているように、上地には上地八景があります。迷わずここを紹介するといわけですが、5年生の中には名前を知っていても、学区のどこにあるのか知らないという子がたくさんいました自分たちの住んでいる学区について、どんなところがあるのか知らないのに他の場所のことはわかりません。そこで行動範囲の広がっ

上地地区再発見マップ  
上地小 中 高 区  
八景



てきた5年生が学区内を歩き、上地八景だけでなく、自然、産業について上地を再発見しようと春の遠足が始まりました。

### 馬頭緑道

今回の遠足で特に知ってほしかったところのひとつに、馬頭緑道があります。ここは矢崎公園を始点とした、「矢崎こいの広場」のひとつとなっています。広い歩道にはいろいろな種類の木が植えられていて、緑道となっています。勤労福祉会館の東側から始まる緑道は、若松団地の方に向かい衣浦線まで続き、緑丘学区部分を含め延長500メートルほどあります。では、馬頭緑道の成り立ちについてふれておきましょう。

### 緑丘上地地区画整理組入口により誕生

上地と隣接する緑丘はかつて、山林と農地を中心とした山間の田園地帯でした。しかし、鉄道の駅に比較的近く、住宅地として適した位置にあり急速に無秩序な宅地開発が予想されました。これらを未然に防ぐために公共施設の整備改善および宅地の利用増進を計って、健全なる住宅地としての計画的な市街地を造成しようとなりました。当然住宅ができれば排水路を確保しなければならず、その有効利用として排水路の上に緑道が整備されました。これによって、地域住民の憩いの場としてのコミュニティ空間を確保しました。

### 馬頭緑道を歩いて

さて、実際に馬頭緑道を歩いてみました。勤労福祉会館側から、緑道へと入っていきましょう。道路は茶色いブロックで敷きつめられ、真ん中に木が植えてあります。比較的高い木があり、広い歩道なので歩きやすいです。厳密にはこの部分だけが上地学区です。

### ・四季ゾーン

次は、フジ棚に覆われた緑道の始まりです。このフジ棚は、柱のような太い角材で組まれ、とても見ごたえがあります。ちょうど遠足のところには咲き始めていました。フジ棚のトンネルに入っていくと両わきにはいろいろな種類の木が植えてあります。そしてそれぞれに名札がかけてあるので名前を覚えることができます。ここは舗装されておらず、土の道を歩くことができます。

### ・太陽ゾーン

フジ棚を出ると、広いモダンな道に変わります。茶色のブロックを敷きつめた道で、電灯もデザインされています。両側の木も歩道の一部として植えてあり、花壇には花が咲いています。曲がり角は、ちょっとした広場になっています。その中心には、この緑道のシンボルとして、太陽の塔があります。まさしく太陽のように感じられ、その周辺はとても明るい空間となっています。

### ・せせらぎゾーン

いよいよメインの緑道へと入っていきます。ちょっとした庭園を歩いているような感じを受けます。ここも土の道で、人工の小川が作られているこの一画は、せせらぎゾーンと呼ばれています。途中には、かわいい橋も一方所で架かっています。そして両側の植えこみは、腰の高さぐらいに整備され木を鑑賞するにはちょうどよくなっています。

### ・たたずみゾーン

四季ゾーンの主な花

ハギ	ニシキギ	ムクゲ	モクレン
ハナミズキ	ライラック	サザンカ	シャリンバイ
サツキ	ユキヤナギ	カルミヤ	アジサイ
レンギョウ	サルスベリ	オトメツバキ	ヤマブキ
アベリア	ヤマモミジ	マユミ	ジンチョウゲ
ハコネウツギ	ソメイヨシノ	タイサンボク	ヤマツバキ
イチョウ	キンモクセイ	ヒラドツツジ	

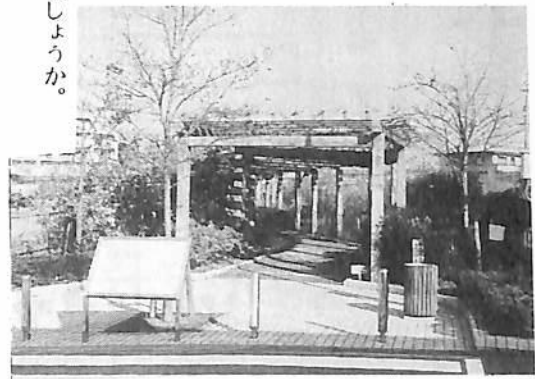
衣浦線までのほんの短い部分がたたずみゾーンです。さまざまな形や大きさの石が敷き詰められていて、中央部には屋根のついたベンチがあります。落ち着いて休めるところとなっています。

#### ・ちびっ子ゾーン

衣浦線を越えたところに、ちびっ子ゾーンがあります。かわいい遊具が置いてあります。子どもたちもここを訪れ、とても気に入って遠足を終えたようです。

#### 上地八景めぐり

最後になりましたが、子どもたちは上地八景を回ってみて、上地をどう感じたでしょうか。



#### はじめて見た上地八景

堀岡 亮太

ぼくは、前から上地八景ってどうゆうのかなあと思っていました。初めて見たときすごいきれいでした。とくに、寂静寺がきれいでした。かねつきのまわりの絵が、へんなゆうれいみたいで、足がなかったです。おはかがありとてもきれいでした。

国道248号線を通った時、すごく車がいっぱい走っていて、道路もすごい広がったです。トラックとか小がたトラックがとくに多く走っていました。奥山田池に行った時、水の色が緑色ですごくにごっていて、まえより水がへっていました。池の中にあきかんとか、ごみがまざっていました。大谷公園に行つてんぼうだいのぼつて、上から見ると、いろいろな建物が見えてとてもきれいでした。木とかがいっぱいあって自然だなあと思いました。衣浦線も、国道

248号線といっしょで車がいっぱい走っていてあんまり人がいなかったです。ごみが落ちていなくて、とってもきれいでした。三善寺に行くと、この寺もおはかがありました。寺は古くてもりっぱでした。だきあっているじぞうがありました。かねつきの代わりに、石がぶら下がっていました。上地湿原に行きました。魚がいて、ススキ（アシ）が生えています。草もいっぱいはえています。池の色は、ちょっとだけ緑色でした。どこも行ったことのないところでした。とてもいいとこばかりだと思います。

今までまったく行ったことのなかったところも多かったわけですが、それぞれの場所でそこをしっかりと観察し、よいところもそうでないところも、じっくり見ることができました。子どもたちも、私たちのまち、上地について、今まで以上に知ることができ、とてもすばらしいことを再確認できたことでしょう。これからの季節、休日によく散歩するにはとてもよいところばかりです。子どもたちといっしょに一度訪ねてみてはいかがでしょう。

## セーター工場を訪ねて

（成瀬メリヤス株式会社）

五年担任 名倉 嘉章

上地学区の西の端、旧国道248号線沿いの若松町に、成瀬メリヤス株式会社というセーターを作る工場があります。今回のふるさとシリーズは、ここをご紹介します。

小学校三年生の社会科で、身近な地域の工場を見学して学習するという活動があります。学区周辺にも多くの工場があり、見学を是非したいと考えておりました。しかし、三年生になって初めて社会科を学習する子供たちに、身近な題材で、何とか原料から完成品までの工程を見ることができない工場はなかなか見つかりませんでした。そんな折、上地学区に隣接した成瀬メリヤス株式会社なら、その条件を満たすのではないかとという情報を得て、早速下調べを行うことになりました。また、成瀬メリヤス株式会社は、本校四年三組の成瀬正人君のお父さんとご家族の方が経営されていること、上地学区の方もたくさん働きにいかれていること



<成瀬メリヤス株式会社外観>

をお聞きし、それならふるさとシリーズにて、上地学区の皆様ぜひ紹介をしたいと思います。六月末のお忙しい中、職員一名（長坂・名倉）で、見学をさせていただきました。

工場では、正人君のお父さんの明氏（成瀬メリヤス工業常務取締役）に、案内をしていただき、お話をうかがいました。

### ◆会社概要

名称	成瀬メリヤス株式会社
所在地	岡崎市若松町
代表者	成瀬 正市（上地町出身）
創業	昭和二十三年五月五日
製造品目	セーター・カーディガン・スカートなどニット商品 （婦人物七十パーセント、子供物二十五パーセント、紳士物五パーセント）
生産量	年間約二十万枚 一日平均約六百五十枚
従業員数	五十名前後

### 一、メリヤスとは

メリヤスの語源は、スペイン語のメディアス（media s）、ポルトガル語のメイアス（meias）からきた言葉で、漢字では、「莫大小」（伸び縮みがきく、大小自由になるという意味）、「目利安」という字を当てるそうです。歴史は極

めて古く、日本にどのように伝えられたかは定かではありませんが、現存する最古のメリヤス生地は、徳川光圀（水戸黄門）のものもひきとられています。明治に入って、絹み機が輸入され、工場生産制の基礎が築かれたと言われています。

その初期は、軍需品としての靴下に始まり、やがて民需に根をおいた産業に移行するのは、大正の時代に入ってからだと言われています。さらに昭和初期に入って、横編メリヤスが登場してから、セーター、マフラー、ショール、帽子といった身の回りの製品が出始めたそうです。

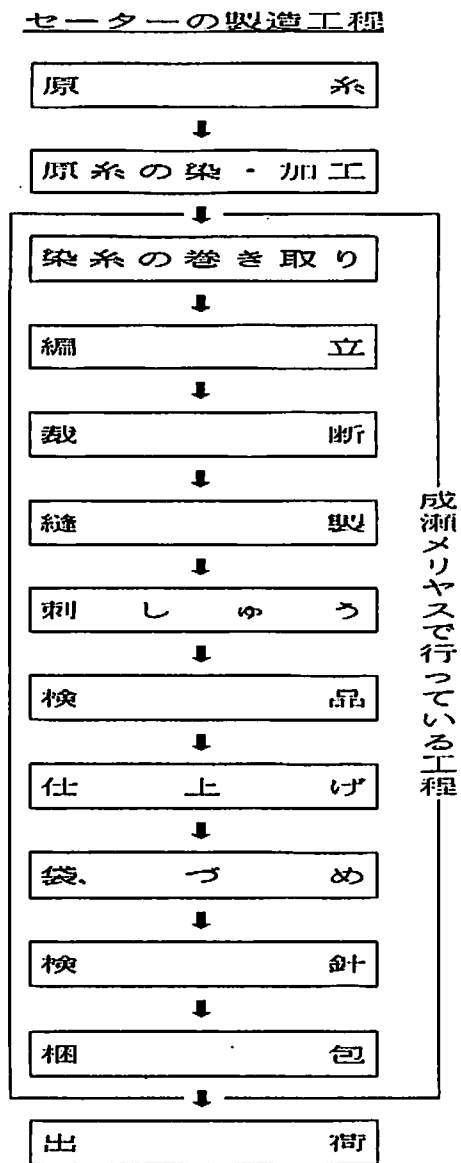
昭和四十年代に入って、原糸としての合成繊維の成長がメリヤスの急成長の発火点となり、今日の『ニット時代』を築くことになるそうです。

岡崎市は、戦前より繊維工業が盛んで、特に再生原料の集落地として、ガラ紡工業が盛んでした。戦後は、人々の衣料が和服主体から洋服主体へと変化し、毛織物の需要が増大し、岡崎もその毛糸紡績業が盛んとなりました。同時に、メリヤスから出発したニット産業も発展して、今に至るそうです。

岡崎地区は、十年前には、子供用ニット製品は、全国のおよそ五十パーセントを生産し、『子供セーター日本一』と言われていたそうですが、今では子供服におけるニット製品の需要が少なくなり、婦人服主体の生産地に移行してきたそうです。成瀬メリヤスでも、今ではその主力は婦人物だそうです。

## 一、 仕立工程

セーターができるまでには、多くの工程があります。非常に細分化されていて、十五以上の工程をおよそ一〜二か月かけて、完成品にするそうです。それゆえ、成瀬メリヤスのように、編立から製品化まで一貫して生産する業者は少なく、分業制と下請制が発達しているそうです。セーターができるまでの大まかな工程について、成瀬明氏にお聞きしました。



## ① 原糸・糸染め

この二つの工程に関しては、成瀬メリヤスの工場内では、行っていません。しかし、セーターの出来不出来を決める、重要な工程です。

原糸は、毛、アクリルなど様々な種類のことを糸問屋から取り寄せます。秋冬物のセーターは、動物系の繊維（羊、やぎ、うさぎ）とアクリル（石油から作られる）などから作られます。春夏物のセーターでは、植物系の繊維（綿、麻など）とアクリル

リル、レーヨンなどが多く用いられます。原料は、例えば羊毛の場合は遠くオーストラリアや、ニュージーランドなど外国から来て、製糸工場から糸問屋に来ます。

糸染めは、愛知県尾西市内の工場や岡崎市内の染色工場に依頼しています。イメージ通りの色が出ているかどうか、微妙な染料のさじ加減にかかっているそうです。その微妙さは、「糸が足りなくなつたから、糸を追加して染色する。」と言つても、二度と同じものができないと言つてしまうほど厳しいものだそうです。

染められた糸は、認(かせ)という束ねられた状態で、工場に納入されます。

## ② ヌル巻

認(かせ)の状態から、編立の機械にかけるためには、糸巻きと言う作業を行う必要があります。みなさんには、糸糸を手で編む前に、二人で組になって認から糸系玉にする作業を、機械がすると考えていただければいいと思います。円筒状に巻くコーン巻き、円すい状に巻くチーズ巻き等、巻き方の種類はいろいろですが、いずれも機械へ均一の力で糸をかけるために行うもので、この工程が十分でないとき上がりたセーターの編み目が不揃いになってしまうそうです。

この工程は、成瀬メリヤスの工場内だけではなく、協力工場で行ったり、内職の方を頼んで行っています。



<糸巻機を説明して下さる、成瀬 明氏>

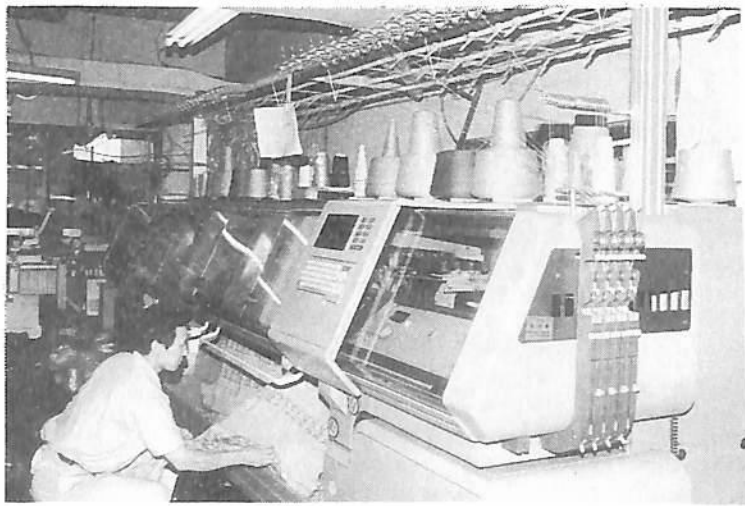
## ③ 編立

工場に足を踏み入れると、真っ先に耳にするのが、この編立の機械の音です。原理的には、家庭用の編み機と同じだそうです。性能は格段の違いがあります。昔は、職人さんの手による編立が行われていましたが、今では機械化されています。どんなパターンで生地を編むか、昔はその入力もこつこつ人の手で機械に設定していたそうですが、現在では、コンピューターによるパターン入力を行っています。

用途によって様々な編立機が入れられており、機械の調整以外は自動化されています。成瀬メリヤスには、ドイツ製最新鋭の機械も導入されていました。この機械なら、今まで手編みでしかできなかつた作業も、なんなくできてしまうそうです。

手作業の多いセーター作りの工程の中でも、この編立の工程は、急激に機械化された工程だそうです。

編まれたセーター生地は、調子を整えるために、スチームがかけられて、編み目を均一化させ、裁断に回されます。

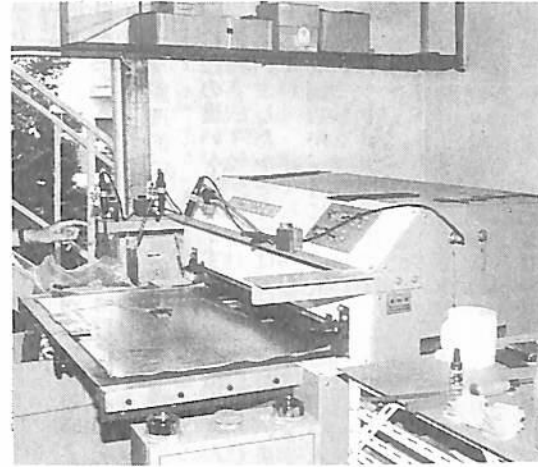


<最新鋭の編立機>

#### ④ 裁断

裁断は、立体裁断と言って、何枚もの生地を重ねて、型紙に沿って裁断をします。

一枚のセーター生地から、前身頃、後身頃、袖（2枚）の部分が、切り出されます。立体裁断に向かない柄の生地については、レーザーのセンサーを利用した、裁断機を使うこともあるそうです。



<レーザーを利用した裁断機>



<立体裁断の様子>

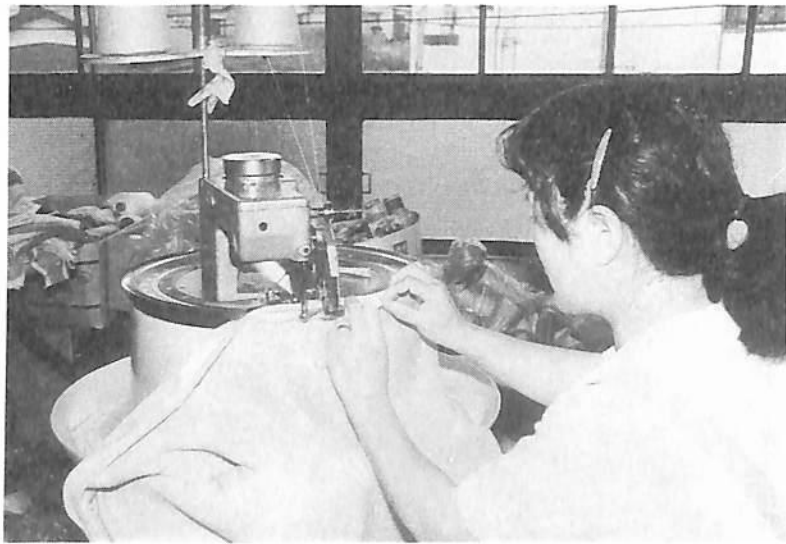
#### ⑤ 縫製

縫製は、裁断によって切り出されたものを、ミシンによって、オーバーロック、本縫い、ボタンホール、ボタン付け、すくい縫い、リンキングなどの工程を行います。

セーター生地は、いわゆる織物製品とは違い、一本の糸から作られているだけに、生地の端の処理は重要なポイントをしめています。また、その都度変わるセーターの大きさ、種類によっても、ミシンを使い分けなくてはなりません。そのための特種なミシンがたくさん導入されています。

縫製の部門には、たくさんのミシンと多くの人が配置されています。どの人も、手慣れた手つきで、素早く、正確にミシンを動かしています。セーターがだんだん形になってきました。

製品によっては、この後、機械刺しゅうや手刺しゅうなどの作業を行うこともあります。



<特殊なミシンで縫製をする>

## ⑥ 検口巾・仕上げ・代表詰め

セータとしての形になった後、検品と仕上げという工程を行います。

傷や汚れはないか、人の目で厳しくチェックします。少しでも不良箇所があると、製品としては出荷できないからです。

仕上げは、検品されたセーターに、再びスチームがかけられます。成瀬メリヤスでは、人の上半身の形をしたハンガーに完成したセーターをかけ、内側から蒸気を出してセーターの形を整える機械を使っています。

形の整えられたセーターに、いろいろな表示が付けられます。みなさんの着ている洋服にも、衿のところのメーカー表示や品質表示などたくさんの表示がしてありますね。成瀬メリヤスでは、仕事を頼まれた、レナウン、タキヒヨー、リオなどのアパレルメーカー（問屋、商社）のラベルが付けられます。さらに、買い求める人が買いやすいように付けられる、紙のプレート表示なども、一枚一枚ていねいに取りつけられます。

そして、透明なポリエチレン製の袋にセーターを入れます。ここで、みなさんが店頭で見ると同じ状態になります。



<一枚一枚ていねいにラベルをつける>

## ⑦ 検針・梱包・山出荷

もうセータができ上がって、集荷するだけの状態だと思いがながら見学をさせていただいていると、最後に大切な工程のあることをお聞きしました。それは、検針という工程です。

袋詰めされてでき上がったセーターを一枚一枚、機械のベルトの上に乗せます。この機械は、金属探知機で、金属が少しでも発見されると大きな音が出て、働いている人に知らせてくれます。

セーター作りでは、編立、裁断、縫製、刺繍など、ほとんどすべての工程で金属を使っていますが、何かの拍子にその部品のかげらや針がセーターに入っては、大変なことになります。そこで工場では、すべての作業が終わった時点で、この検針という作業を行うのだそうです。この機械なら、どんなに小さな金属のかけらも見逃すことはないそうです。

いよいよ箱に梱包され、出荷されます。作られたセーターは、いったんアパレルメーカー（問屋）の配送センター（東京、大阪、名古屋、神戸など）に送られ、全国のデパートやスーパー、専門店の店頭で並べられ、売られるのです。



<完成品を検針機に通す>



## 二、生産の努力・工夫

工場の見学をしながら、成瀬明氏に生産の努力や工夫についても、いろいろなお話をうかがいました。

「流行に左右されやすいものを扱っているので、納期が短いことが大変です。また、ひとつのパターンですっと同じものを作るわけにはいきません。人々の好みは、多様ですから。糸を染めてから（工場に原料が入ってから）およそ一か月くらいで出荷までの多くの工程を行わなければなりません。早いものでは、三週間ということもあります。」

「生産の効率化を図るために、工場内だけでなく、多くの協力工場や家庭内職による協力で、セーター作りに取り組んでいます。機械では、できない部分も大切な仕事です。上地学区の人にも、たくさん頼んでいるんですよ。」

「内職を始め、手作業による工程が多いので、品質管理には非常に気を使っています。検品に関しても、機械、人の目と慎重に検査をしています。」

「生産効率を上げるために、最新のコンピューター機器の導入を図っています。しかし、機械化を図りながらも、逆に機械化できない部分が多いからこそ、作りがよいもあるのですよ。」

そのほか、アパレルメーカーやデザイナーのイメージと一致する、製品作りを行う難しさなど、お話をいただきました。

★ 以上、成瀬メリヤス株式会社のセーター作りの様子について、紹介をさせていただきました。お仕事の内容のほんの一部しか紹介できませんでしたが、町で、雑誌で見かける、最先端の流行の商品が、私たちの身近な地域の工場から作り出されていることを知り、驚きました。秋には、子供たちとぜひ見学におうかがいしたいと思います。

## 暮らしを高める施設

～ごみステーション～

四年担任 西田 貴子

子どもたちに「ごみについて知っていること」を聞いてみました。

「ごみは、もえるごみともえないごみに分けてるんだよね。」

「決まった日に出すと、ごみを集める車が集めにくるんだよね。」

ほとんどの子は、ごみが種類別に集められることを知っていました。さらに、社会見学により、集められたごみが中央クリーンセンターへ運ばれ、処理されていることも知ることができました。しかし、「自分の家のごみを出す場所は？」「何曜日に出しているの？」という質問には、はっきりした答が返ってきませんでした。

ごみを家のくずかごへ捨て、まとめて出すことは知っていても、そのごみがどのごみステーションに出されているのか、また、どのようなきまりがあるのかごみステーションの見学をしながら学習していくことにしました。

ごみ収集日は場所によって違う？

まず最初に、自分の家のごみ収集の方法について調べることにしました。

①自分の家のごみステーションの場所

②ごみを集めに来る日

③集めに来る時間

ごみステーションということばを初めて知った子が大半でした。また、調べる前はごみを集めに来る日が毎日であると思っていた子もいました。

「もえるごみは週に二回で、もえないごみは週に一回だね。」

「集めに来る時間が午前と午後に分かれているね。」

「場所によって集めに来る日がちがうんだね。」

「上地十区は、もえるごみが月木のところと水土のところがあるんだね。」

家の人に聞いてきたことを発表だけですませてはいけないと思い、「ごみステーションマップ」をつくってみました。できあがった地図を見ながら、どの学区にもごみステーションがあること、大きな道沿いに設けられていることを知りました。今度は、実際にごみステーションの見学に行ってみることにしました。

### ごみステーションの見学

月曜日、子どもの家の前にあるごみステーションへ見学に行きました。ここはクラスの二人の子の家の収集場所でもありません。そこには道路をはさんでもえるごみともえないごみに分けられていました。出されているごみぶくろの量も、もえるごみの方が圧倒的に多く、家庭から出るごみの多さを感じさせられました。ふくろの中身が出ないように口をかたくしばってあり、ごみのおいも多少抑えられているようでした。一人の子が、

「このごみ、ぼくが学校に行く前に出したゴミだよ。」

と、みんなに見せてくれました。

「うん、これならごみ収集のおじさんも『合格』といってくれね。」

ほかの子も中央クリーンセンターへ見学にいった時のおじさんの言葉を思い出しながら合格をつけてくれました。

次に、ごみについての一人調べをすることにしました。

- ①ごみの出されている様子
- ②ごみステーションの周りの様子

「ここに看板が立ってるね。」

「新聞紙や雑誌は廃品回収に出した方がいいんじゃないかなあ。」

「ごみステーションが家から少し離れているのは、において迷惑をかけないためかなあ。」

「あきさんは学校に持ってくるようにすると、リサイクルができて、うめ立て地も増えずにすむんじゃないかな。」

ごみステーションは、現代の生活のなかで不可欠な施設のひとつです。だからこそ、ルールを守り、健康で衛生的な生活を送れるようにしたいものです。



山積みされているごみ。

家が多くなればなるほどごみがたくさん出るような気がしました。なるべく少なくしたいです。

都築 英明

集められたごみをどんなふうにもパックカー車へ入れていくのを見てみたいです。

白濱 伸悟

最後に中央クリーンセンターからの五つのお願いを全員で確認しました。

☆決められた場所、時間、日に出す。

☆もえるもの、もえないものを分ける。

☆水をよく切って出す。

☆ガスのはいつているカンは穴を開けガスを抜く。

☆ごみぶくろはしっかりとしばる。



袋の口をしっかりとしばって。

## 上地の農業 — 施設園芸 (カーネーション栽培) —

菅沼 剛

上地学区でカーネーション栽培をしている農家があるということで早速訪ねてみました。上地二丁目四八にあるビニールハウスがそれです。前田公園から西の方へ行くと台地につき当たります。その台地の下あたりに六百坪程のハウスがあります。

このハウスを経営してみるのは、上地町の畔柳勝利さんです。

岡崎市でカーネーションを栽培しているのは畔柳さんのところと、

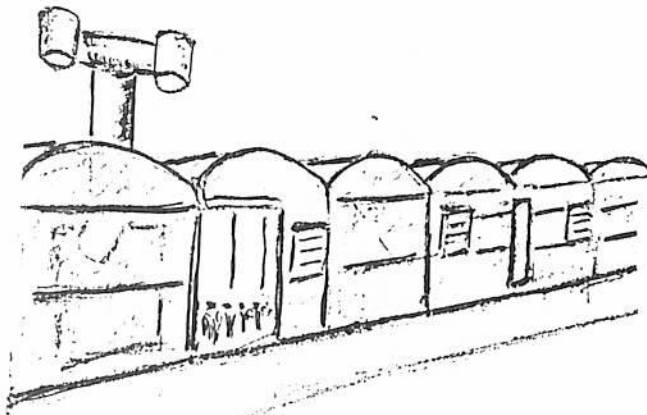
美合の菅農高等学校だけです。農家で栽培しているのは畔柳さんだけということになりますね。

なぜカーネーションを栽培しているかをたずねてみました。

第一の理由は、畔柳さんが高等学校で施設園芸を勉強し、それを農業経営に生かしたかったということだそうです。同じような仲間が幡豆郡や蒲郡市にいます。

### 市街地での農業

畔柳さんは、三十年近くこの仕事をしているそうです。以前は、ほかの土地でやっていたそうですが、上地の区画整理後、今の土地に移ったそうです。今のハウスになってから八年ほどたつそうです。ハウスのまわりは、すぐ住宅がせまっています。住宅地の中での農業経営ということいろいろ苦労があるそうです。



畔柳さんのハウス

幡豆郡や西尾では、水田利用再編対策推進事業として広い水田地帯で大規模なハウスでカーネーション栽培をしています。市街地での農業とは、だいぶ条件が違うようです。

#### 気候的条件

カーネーションは温室で栽培されることが多いので、暖かい成育条件の植物と思われがちですが、そうではありません。成育の適温は、15度C〜20度Cで、比較的冷涼な温度環境が適しているそうです。温度を調整するためには、露地で栽培するよりハウスの方が管理しやすいですね。この温度条件を考えると、夏は温度を下げ、冬は温度を上げることが必要です。畔柳さんのハウスには、大きな羽のついた換気扇がいくつもついていています。これは、夏の暑い時ハウスの中の温度を下げるためのものです。また、重油のポイラーによる暖房施設もついていています。冬場の夜に使うそうです。

岡崎では、冬場の暖房に使う重油についても、温暖な蒲郡や幡豆郡の数倍も多くなかかってしまうそうです。カーネーション栽培農家が岡崎市で一軒だけというのもうなずけるような気がします。それでもカーネーション栽培を続けているのは、畔柳さんの施設園芸にかける情熱ではないかと思えます。

#### カーネーションの由来

カーネーションは、母の日の花として有名ですね。この花は、南ヨーロッパの原産で栽培の起源は、二千年も昔からだそうです。ギリシャ神話にも、美しい娘の生まれ変わりの花として登場しています。名前の由来はさまざまでラテン語の「肉色」(Incarnation)という、原種の色から来た説、また、シエクスピアの頃、花冠として使われていたことから「戴冠式」(Coronation)からきた説などが伝えられています。色彩が鮮やかで美しく、香りも良いため、ローマ時代にはぶどう酒に入れて飲んだり、宴会の時この花冠を頭に乘せる習慣があったそうです。日本では、江戸時代にオランダ人によって初めて作られたそうですが、もちろん花壇で栽培するものでした。今日栽培されているのはほとんど温室です。こ

のように温室で栽培される系統のものは、明治四十年以後の輸入されたものです。日本におけるカーネーションの歴史は比較的新しいですね。

#### カーネーションの種類

現在では、色、花形など品種改良が進み、たくさんの種類のカーネーションがあります。どんどん新しい品種が改良され美しいカーネーションが誕生しているようです。畔柳さんのハウスでも、六〜七種類のカーネーションを栽培しています。赤、ピンク、黄色、白などの色の花が見られましたが、同じ赤やピンクでも微妙に色の違いがあるようです。

カーネーションの種類について日本有数のカーネーション産地である一色町農協の三谷さんに聞いてみました。

現在、一色町で栽培している品種だけでも六十種近くあるそうです。さらに、毎年新しい品種が次々に出てくるそうです。したがって、百何十種類もの多くの品種があるようです。

大きく分けると、ひとつの茎にひとつの花が咲く「スタンダード」とひとつの茎に四〜六個の花が咲く「スプレー」という品種に分かれます。「スタンダード」や「スプレー」は、色、形などによりさらに細かく分類されるようです。

消費者の好みが変わるため、どの品種を栽培したら良いかということが、大変大きな問題となるようです。現在は「スプレー」品種の人气が高まり、栽培



スプレー品種のカーネーション

面積も増えているようです。

### 手作業の多い仕事

一本一本大切に育てていくため、手間のかかる手作業がかかせません。大型種のものでは、がく割れを防ぐため一本一本につやけしのセロテープを巻くという作業があるそうです。何千本もの花のがくをセロテープで巻くという作業は骨の折れる大変な仕事ですね。

また、良い花を咲かせるための余分なつぼみを取る作業も大変な手作業です。

### 花の病気

花の病気も大敵です。病気になると、白っぽく枯れてしまい、時にはハウス全体の何千本もの花が枯れてしまうこともあるそうです。株全体が枯れてしまうような病気のほかに、花が変色してしまうもの、茎が曲がってしまうものがあります。これらの病気にかかるカーネーションの商品価値が無くなってしまいます。そうならないために土壌を消毒したり、病原菌を持たない強い苗を育てるなどの工夫がなされています。

このような多くの苦勞と、花を愛する心があって初めて市場へ出荷できるのですね。

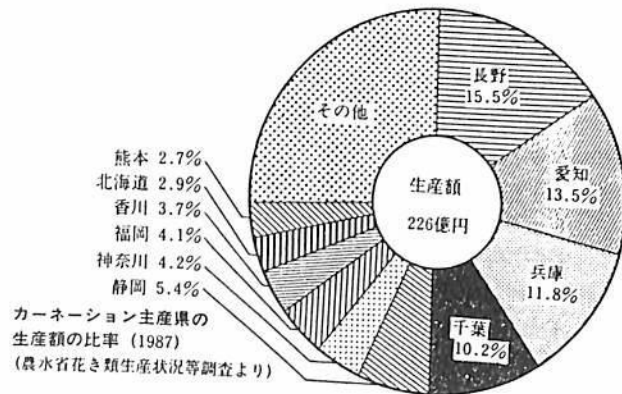
全国的に見ると、長野・兵庫・千葉とならんで愛知県は、カーネーション

生産ではトップクラスだそうです。

愛知県下では、幡豆郡一色町の生産が第一位で県内生産の三十%近くを占めているようです。近代的な設備を備えた温室で、年間二千万本も出荷されているそうです。出荷の最盛期は、やはり母の日の前にした五月上旬で連日十萬本以上のカーネーションが、名古屋を初め関東・東北方面へ出荷されているそうです。需要の多い時期には、ヨーロッパからの輸入ものも市場に出回るそうです。

畔柳さんのハウスでは電照菊の栽培もしています。カーネーションは連作をきらうので、一年間カーネーションを栽培し土壌消毒をし次の年は電照菊を栽培するそうです。大きく三つに分かれたハウスでカーネーションと電照菊を交互に栽培しているそうです。

カーネーションについていろいろお話伺いましたが、市街化の進む上地区での農業の難しさをあらためて感じると同時に、畔柳さんの農業に対するひたむきな情熱を感じました。このハウスも畔柳さん一代で終わりだそうで、寂しい感じでした。



がく割れ防止のため

つや消しのテープを巻く

# 国道二四八号線を歩いて

～二四八沿線の店の聞き取り調査～

四年担任 深津 伸夫

上地小学校のすぐ西を国道二四八号線が通っています。私たちにとって国道二四八号線は、毎日の生活に欠かせない、とても身近な存在であり、「二四八(二一ヨンバー)」の愛称で親しまれています。片側二車線で道の幅は三十メートルにもなり一日中、車の通りも絶えることのない、岡崎を南北に貫く主要道路であるといえます。

小学校四年生の社会科で「新しい開発」という学習があります。この上地学区も、二四八の開発とともに発展してきた新しいところです。そこで、子どもたちと一緒に二四八を調べてみることにしました。

今の四年生というのは、昭和五十七年から昭和五十八年にかけて生まれた子どもたちであり、今年度で十才になります。上地小学校が開校したのは昭和五十八年ですから、まさに上地学区とともに成長してきた子どもたちということができます。しかし二四八の開発や、上地学区の発展については、ほとんど知っていないようです。なぜなら、二四八を調べる前に四年三組の三十四名の子どもたちに自分の出生地を聞いたところ、次のような結果が得られたからです。

- ・今、住んでいる家 四名
- ・上地学区だけれども家が違う 一名
- ・岡崎市内の他の学区 十名
- ・他の市二名
- ・他の県 七名

この調査から、生まれたときから上地学区に住んでいた子は五名しかいないことがわかりました。つまり、昔からの二四八の変容や、学区の移り変わりを自分の目で見た子どもは少なく、家族から話を聞くということもなかったという子が多いみたいです。そこで、まず上地学区の二四八を歩いてみることにしました。

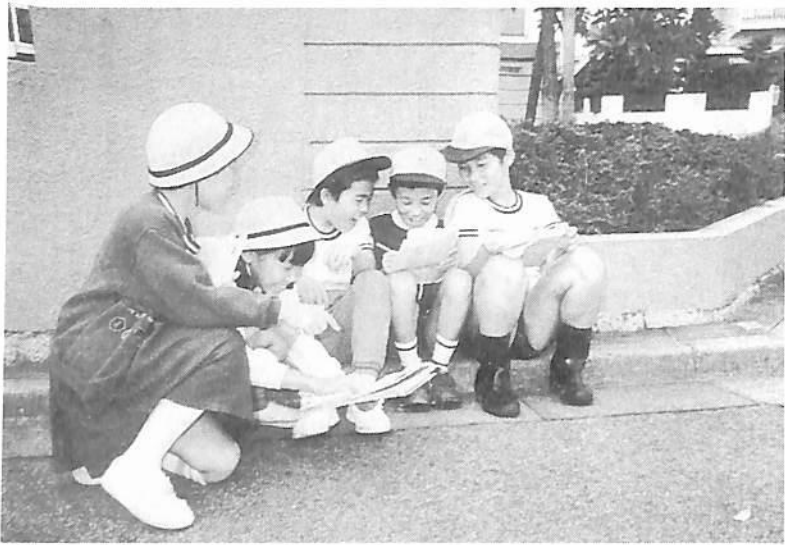
## 一、二四八の目見学

二四八は車で通ることは多くても、歩いて周りの様子を見るということはありません。南は、上地小学校の西にある地下道のところから上地自動車学校の前を通り、衣浦線との交差点で横断歩道を渡り、ミルミルのところまで歩いてきました。北はカレーのココ壺番から北上し、地下道を通り、じゃんごからバチンコの前まで歩いてきました。このとき見た二四八は、とても印象的でした。

○交通量がとても多い。

○片側二車線(交差点は三車線)ある。

○中央分離帯がある。



「おもしろいことが分かったぞ！」

○広い歩道がある。

○周りにお店がたくさんある（飲食店・車や・服や…）

- ・二四八から入りやすくなっている。
- ・大きな看板がある店が多い。
- ・どの店も広い駐車場がある。

いろいろなことを発見した子どもたちは、一つの大きな疑問にぶち当たりました。

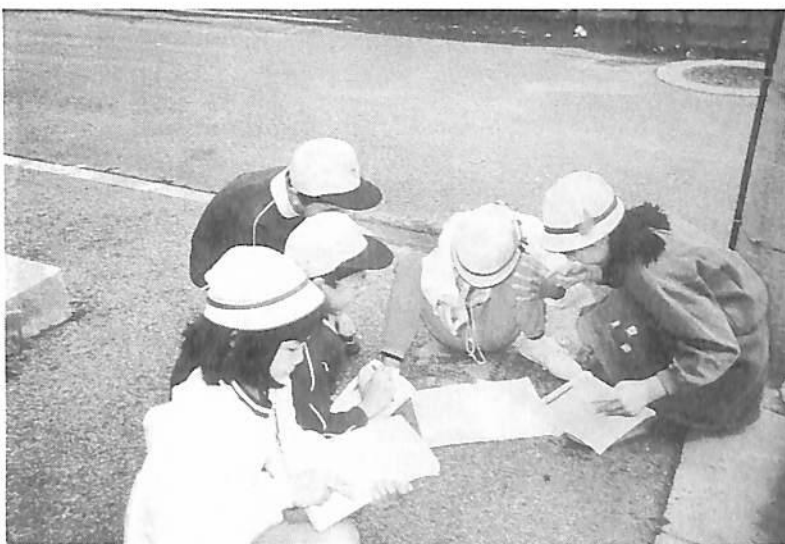
どうして二四八の周りには、普通の家が少なく、お店が多いのだろうか？

この問題を解決するために、新たに計画を立てることにしました。

### 一、二四八沿線の建物の

#### 聞き取り調査

四年三組の子どもたちは、二四八について、より詳しく調べるために、二四八沿線の建物に聞き取り調査を行う計画を立て



「248にはこんなにたくさんの店があるんだなあ！」

ました。しかし、全部で七十〜八十も建物があつては、クラス全員で調査に行くわけにもいきません。そこで六つの班に別れて、二四八を六等分して聞き取り調査に出かけることにしました。聞き取ってくる内容は、

①店ができたのはいつか。（何年前か）

②店ができる前は、何があつたのか。（例、田、畑…）

③どうして二四八に店を開いたのか。

④店を開いたところの二四八の様子はどうだったか。の四点にしほりました。これだけの内容が分ければ、二四八がいつごろできたのかつかめるような気がしたからです。

十月二十日、火曜日、三時間目が始まると、班ごとに聞き取り調査に出発しました。上地自動車学校の方へ向かう班、衣浦線手前のガソリンスタンドの方へ向かう班、紳士服のトムに向かう班、五十番へ向かう班、ココ壱番へ向かう班、そして一番遠いじゃんごの方へ向かう班がありました。今までの見学と違うところは、先生がいないところです。頼りになるのは自分たちの班にいる五、六人しかいません。少し緊張気味でしたが、元氣よく聞き取り調査ができたようです。



（紳士服のトムでの聞き取り調査の様子）

「どきどきしたけど、全部聞けました。」

「椅子に座ってくださいって言われたから座ったら、すごく詳しく教えてもらえました。」

「お茶をどうぞって言われたけど、授業中だからがまんして飲みませんでした。」

班長の報告もいきいきとしていました。自分たちで店や家回り、いろいろなことを聞き取ってくることでできたということが大きな自信になったみたいです。△聞き取り調査の一部▽

### ・岡崎セイコー

① 昭和五十一年

② 空き地

③ 昔は本当に細い道だった

④ 昔建てた所は狭かったから変わって作った

(一班の聞き取り調査から)

### ・五十番

① 昭和五十三年九月

② 南公園の続きの山

③ 全然ちがう

④ 作る所が無く、市が作ったものを買った

(四班の聞き取り調査から)

### ・南動物病院

① 昭和五十五年

② 松林

③ 店があまりなかった

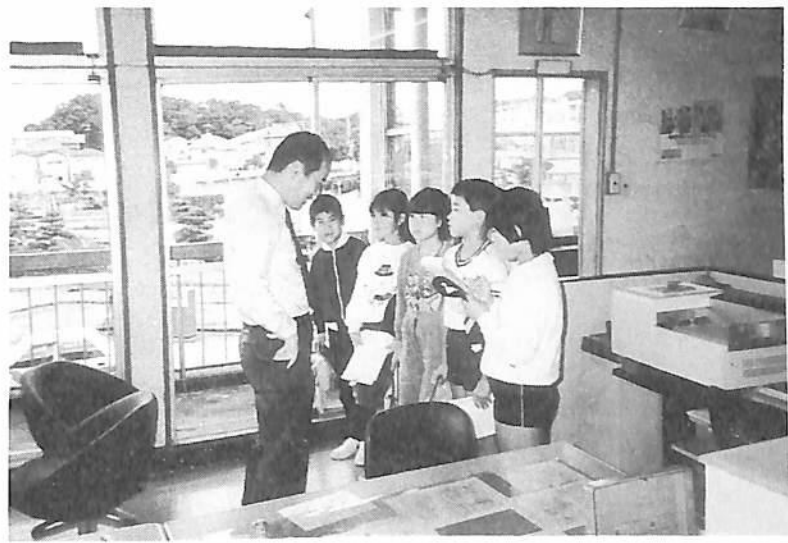
④ 人通りが多くて目立つから

(五班の聞き取り調査から)

結局、三十四の建物から聞き取り調査をすることができました。調べた中で一番古いのが「上地自動車学校」で昭和四十六年十二月、一番新しいのが「はるやま」で平成四年五月にできたそうです。建物が多くできたのは、昭和六十年代が多く、できる前は空き地や山だったなど、新しくできた建物だということを感じることができました。



(寺井石油での聞き取り調査の様子)



(上地自動車学校での聞き取り調査の様子)



## 三、二四八の地図作り

聞き取り調査が終わった後、みんなで二四八の地図を作ることにしました。聞き取ってきた所を中心に、班ごとに作業しました。店は赤く囲むことにしたら、地図の大半が店だということがよくわかりました。特に飲食店と車に関係する店が多く、普通の家はほとんどありませんでした。

この地図を作った後は、みんなが二四八博士になりました。どこに何があつて、どんな感じか、ということがすぐにわかっってしまうぐらい、みんな二四八について真剣でした。

### △班の発表から▽

- 二四八は昔はなかったんだと思います。(西脇 寛)
- 二四八ができたころは、周りは山でいっぱいだったんだなと予想しました。(稲吉 可奈子)
- 昭和四十四年ごろは、店がなく、田んぼ、畑、松林が広がっていたと思いました。(松岡 慧)
- 北の方に古い建物が多いから、二四八は北の方からできてきたんだと思います。(鶴田 千咲子)



「ここって何があったっけ？」

## 四、私たちのふるさと「上地」をもっと調べていきたい

「どうやら二四八は新しい道路みたいだ。」

二四八を調べていくうちに、自分たちが生まれたところから今までに、大きな移り変わりがあったことに気づきました。

そして、二四八には、歩行者専用道路が作られていたり、歩道が作られていたり、私たちが安心して生活を送れるようになってきていることもわかりました。

### △ノートから▽

- 二四八は昭和五十九年三月に完成した。衣浦線は昭和六十年九月三十日に開通した。(藤原 繭美)
- ぼくたちのことを考えているなんて初めて知りました。感謝をしなきゃと思いました。(磯山 理)

自分たちの足で歩いて、自分たちで聞き取り調査を行い、自分たちで地図にまとめ、自分たちで発表しながら話し合いをして考えていく。この学習を通して、子どもたちの、「上地」に対する思いがとても深まってきたように思えます。

### △授業中の発言から▽

- 上地小学校が、まだできていないところを調べたい。(松原 健)
- 上地の今と昔をくらべてみたい。(天野 優太)

子どもたちは今、自分の目で、このふるさと「上地」を見つめています。その瞳の輝きをいつまでも持ち続けてほしいと思います。今後は、郷土読本『うえじ』に掲載されている写真や資料を使い、学区の昔の姿や、今日までの移り変わりについて、学習していきたいと思っています。

## 自然のサイクルの中で

——成瀬守さんの農業——

専業農家が上地にありました。場所は、上地三丁目、学校から北東に歩いて七分ほどのところ。ご主人の成瀬さんは、八年前から農業を始められました。自分の学んだことを実践したいという希望と、自然のサイクルの中で生きていきたいという願いから始められたそうです。

背の低い生け垣に囲まれたお宅に伺うと、ニワトリやアイガモがあちこち歩き回っていて、とてもゆったりとした気持ちにさせられます。

### ◇有機農業法

成瀬さんは、有機農業とって、農薬や化学肥料に頼らない方法でお米や野菜を作っています。農薬の代わりに人の手で、草を取ったり、野菜についた虫を取り除いたりします。また、化学肥料の代わりに落ち葉の堆肥や鶏ふん、豚ふん、牛ふん、人ふん、油かす、米ぬかなどを肥料として使っています。害虫の出にくい肥料を使ったり、虫が葉に卵を産むところに網をかぶせたりするなど、いろいろな工夫をしています。



三年担任 杉田 雅子

こうしてできた野菜は虫に食われていたり、形が悪かったりします。でも、草を枯らしたり、虫を殺したりする薬がついていないので、私たちの体にとっても良いのです。また、太陽の光を浴び、土から栄養をとって育つので、食べるとてもおいしいです。

### ◇アイガモと稲作

下の写真は、アイガモを八十度のお湯につけるところです。実は、このカモ、初夏の田の草取りの時に、大活躍したカモなのです。

アイガモのひなは、稲がまだ小さい時、稲の間を泳いで、雑草の根を足でかいて切ったり、草の葉を食べたりして、田の草取りのお手伝いをしています。でも、大きくなってしまったので、来年は稲の間を泳ぐことができません。そこで、成瀬さんはアイガモのくん製を作ります。食品添加物が入っていないので、これも体に良いのです。他にも、ハムやベーコン、ジャムなどを自然のうま味を生かして作っています。

次に、普通の農家で行っている稲作と成瀬さんの稲作を比べてみます。

成瀬さんが除草剤や殺虫剤、殺菌剤という農薬を使っていないことがわかります。その代わりに田植えの後、三回も田の草取りをしています。害虫については、上地のあたりでは大きな被害を受けるほど発生しないということでしたが、予防のために、稲をある程度大きくしてから植えるとか、田の水を浅くするなどして害虫の発生を防いでいるということでした。



(雄のアイガモはくん製に)

◇おむ客さんと

結びついた

野菜作り

成瀬さんの畑の土は、以前は学校の運動場にあるようなさば土でした。そこへ、堆肥を入れて、現在のような黒い色をした土を作りました。堆肥は、わらに米ぬか、牛ふん、豚ふんを混ぜて、一メートルぐらいの高さに積んでおきます。こうして半年ほど置いておくと、山の落ち葉のにおいのする、ふわふわした堆肥がで上がります。中には、カブトムシの幼虫やミミズ、ハサミムシがたくさんいます。

初冬の今、畑で見られる野菜は、ダイコン、ニンジン、ハクサイ、キャベツ、レタス、カリフラワー、エンドウ、サトイモなどです。土の性質を考えて、ダイコンにはダイコンに合う畑で育てています。またこれからは、雨が少なく、空気が乾燥してきます。ですから、うねの高さを低くして、水分の蒸発を防ぐようにします。

一か月の収穫量は、ジャガイモなら百キログラム、ダイコンなら四百本〜五百本、キャベツなら二百個ぐらいになります。

<成瀬さん>

<普通の農家>

4月		・農薬 (苗木枯病、白根病)
5月	・代かき ・田植え	・農薬 (イネヌケ病) ・代かき ・田植え
6月	・田の草取り (一番草) ・田の草取り (二番草)	・除草剤 ・農薬 (イネノミダシ病、ウカ)
7月	・田の草取り (三番草)	・農薬 (もんがれ病) ・農薬 (いもち病、ウカ)
8月		・農薬 (いもち病、イネノミダシ病、ウカ) ・農薬 (いもち病、イネノミダシ病、ウカ)
9月		
10月	・稲刈り	・稲刈り

<稲作こよみ>

こうしてできた野菜を、成瀬さんは、一週間に三回、

直接お客さんのところへ届けています。普通はできた野菜は市場へ持っていくのですが、農薬を使わないため形がふぞろいになり、虫食いのものもあるので、市場へ出しても値段が決まらないのです。

お客さんの数は、約六十軒で、岡崎と安城に三十軒ぐらいつつあります。軽トラックで野菜を届けますが、一日がかりになってしまうこともあります。お客さんが、「この前の野菜、おいしかったよ。」

と言ってくれるときが、いちばんうれしいときです。

◇これから

成瀬さんは、将来自分の農場の中で、自然のサイクルが完結するような農業をやりたいと思っています。

例えば、ニワトリがふんをして、それが土の肥料になって、野菜が育ち、ニワトリは、できた野菜の残りを食べて育つ、というようなことです。ぜひ、実現させてほしいものです。

あひるにわとりがいました。  
わたしはわたくしだけかなく思ってたけど、  
ころしてたべる人だとうてす。ちよつとかわい  
そうだと思いました。はたけにいったら、  
キャベツにじんじんがありました。はたけが  
あるところは、白なただったよ。土はわわわわ  
くてふふふとへへみます。この中におおき  
なあながありました。すごかったです。

のう家の見学 (1) 産経 麻紀

---

はじめて見たのは、はじめて見た。そのとき、大谷公園  
の木のたんけんも、よまてた。大谷の森の中はその  
たいふよりよい、いかえしれた。すいこに  
じんをもらた。土をとてたててみた。スーパ  
ーにうらわれているのはくらべものにな  
らな。たのでも、てかえ、てきてたべた。

畑の見学 (1) 市瀬 寛久

## ◇子どもたちと

### 見学をして

三年生の子どもたちは、二学期になって、スーパーマーケット、工場の見学をしています。今回は、三回目の見学です。

堆肥をさわっていると、カブトムシの幼虫が出てきて大騒ぎになりました。また、まだでき上がっていない堆肥の上に乗ると、まるでトランポリンのようで、飛びはねていた子もいました。地面に鉛筆をさすと、すっぽりと全部入ってしまうし、子どもには驚くことばかりでした。最後に、ニンジンを見て見せていただくころには、土のついたニンジンをかじってしまうという盛り上がりようでした。

野菜のほかに生き物がいることを許す畑は、子どもたちをこんなに伸びやかにしました。自然はいいな、というのが正直な感想です。そして、あえて有機農法を選んだ成瀬さんの生き方も、とても新鮮でした。



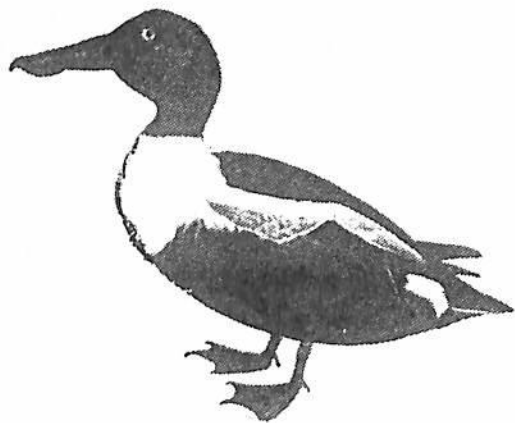
## 奥山田池の水鳥たち

夏の終わりから白サギの群れに心引かれた奥山田池は、今は水が満々として、冬の水鳥を楽しむことができる。

チュウサギ・アオサギはいなくなったが、コサギ百五十羽ほどは今も夕方、小さい群れで帰って来る。その中に五、六羽のダイサギのおおらかな姿を見ることが出来る。岸に、大サギ・小サギが並んでいると親子といたいほどだ。他にアオサギもよく姿を見せている。

南公園の三田ヶ入池はマガモ、大谷池はカルガモ、緑が丘学区の大谷坂池はコガモと住み分けているのに、奥山田池はいろいろの鳥が飛んできている。

●マガモ・カルガモのほかに、水面をぐるぐる回ってうずを作り、浮き上がって来るえさをすくい上げるのにつごうのよいくちばしを持ったハシビロガモ（口ばしが広い）が三年前に大群でやって来てから、毎年やって来る。



ハシビロガモ

若松東 斎藤 かをる

東岸の排水流入口に、食べられるものが多く流れて来るらしく、マガモ・カルガモに混じって、えさを取る時は余りくるくる回っていない。

●今年にはカルガモが、小さなひなを一羽つれていたが、この池のどこかで卵をかえしたのだろうか。大きさからいって自分で飛べるとは思われなほどだったが。九月十五日にカルガモ二羽見つけたが、あのまま池のどこかに住みついていたのかしら。

●カワウの大群がやって来た時は、楽しかった。上空を舞うのもあったが、五十羽以上が一かたまりになって泳ぎながら、黄色いくちばしを上へ、右へ、左へ、と一斉に動かしたり、一羽がチャブんと水くぐりをする、あとも同じようにチャブン・チャブン。シンクロナイズド・スイミングを思わせるような動作だったが、あれはリーダーがいるのか、一羽がやると、みんながまねをするのか分からないが、見事に統一されていて面白かった。

時には水面をけたてて舞い上がったたり、着水したりするが、大騒ぎする割にはカモたちを上手によけているようだった。オシドリだけはこのさわぎをきらったのか、他にも理由があったのか、残念ながらこの頃から奥山田池でオシドリを見ないようになった。

サギたちとちがって夜になると、田んぼかどこか、えさ場へ行くカモたちは、日によって見られる数は違うけれど、今のところ、マガモ・カルガモ・ハシビロガモがよく見られるが、今まで奥山田池にはオナガガモ・コガモ・キンクロハジロなども姿を見せたことがあったから、この冬もいろいろ見られるといいな、と思っている。

## オシドリ

南公園の池へオシドリのメスが一羽、マガモたちに混じってやってきてから、今年で六冬目になる。

二年目は、オス、メスの二羽、メスの方は去年カモたちと一緒にパンくずを食べていたので早くに馴れて、えさをまくと寄ってきたが、オスの方は、遠くにいて春近くなるまで馴れなかった。

三年目、幼鳥を一羽連れてきたのに、一週間もたたぬうちに、親だけになってしまった。

四年目も親子三羽で来たのに、公園の池に見当たらなかつた日、奥山田池へ行ってみたら成鳥、幼鳥合わせて八羽のオシドリがいた。二日ほどして二羽公園へ戻って来たので、奥山田池へ行ってみたら、子オシドリ共にならなくなっていた。

五年目も幼鳥一羽連れていたが、これもいつのまにかいなくなってしまった。

毎年南公園で越冬するマガモたちは、えさをまきはじめると、アヒルと同じように集まって来るが、オシドリはなかなか寄ってこない。それでも二月ごろになると、好きなドングリも少なくなるのか、マガモのまわりまで来るようになり、人が去るとさっと寄って食べ始めるが、その頃はもうマガモ・アヒルがほとんど食べてしまっている。

オシドリにやりたくてパンくずを持って来る人は、いらいらしているのだが、警戒心がなくなっても困ると思いつながら、早く馴れれば良いのにも思う。

十一月終わり頃にやって来て、三月半ばに北へ帰るまで、南公園の池か、奥山田池にいたのが、二月、二つの池で見なくなつたので、今年はず早く帰ったなあと考えていたら、二月十四日、大谷池にいるのを見つけた。三月六日には見たが、大谷池へは、時々しか行かないから、いついなくなってしまうか分からない。

六冬目のこの冬は、いつもより早く十一月十九日南公園の松のところに成鳥二羽見つけた。(公園管理の人が水面に倒れている木を切っているのに出会い、オシドリの好きな木だから残しておいて、と頼んだら、つかい棒までしておいてくれた松である)数年前までは、奥山田池にはカイツブリが十羽以上もいて、いつも明るい声を聞かせてくれました。

毎朝楽しんでいたら、二十三日の朝、二羽の幼鳥を連れていた。頭に二本の赤いすじの見えるだけのオスと、もう親そっくり

りの顔をしたメスが、ほっそりした体で親と並んでいた。

近づく子どもは、すぐ水におりてしまうのを かばうようにして親が泳ぎ出す。

四日間も子どもはどこにいたのかと、ふとこの前のように他のグループがいるかもしれないと、夕方奥山田池へ行ってみた暗くなりかかっていたが、運よく、公園にいたオシドリ四羽が飛んできた。池の中ほどへ泳いで行った時、すうっと寄ってきた三羽があり、七羽のグループになってしまった。幼鳥を奥山田池へおいて親だけが公園へ、様子を見て来たのだろうか。それとも二つのグループなのだろうか。

翌日は雨。親だけが公園に来ていたので、すぐ奥山田池へ行ってみたら、メスとはっきり分かる一羽を含め、子どもの群れ五羽がかたまっていた。

その次の日二十五日は晴れていたが、若松・柱のお祭りや、南公園まつりで朝から花火が上がっていて 奥山田池に鳥の姿はほとんど無かった。

この日以後オシドリは成鳥二羽、幼鳥一羽（オス）の三羽になってしまった。他のはカルガモとどこかへ行ってしまったらしい。はじめ頭の両側が赤いだけだったのが、だんだん親に近い色にかわっていくのを見るのが楽しく、オシドリを追いかける日が続いた。

ある夕方、奥山田池の南西岸、カルガモたちと杭に上がっていた親オシドリの間に子オシドリが、ひょいと飛び上がって並んだ時、メスが子をつつき始めた。何をしているのだろうと思う間もなく子どもは飛び下り、あらためて親の外側へ並んだ。あらあら、泳いでいる時とちがって、休む時は親子順番があるのかと思ったら、ほほえましかった。その後気をつけてみると子どもはいつも親の外側にいるようだ。

十一月二十六日のカワウの運動会以後、オシドリは南公園にいなければ大谷池にいるようになった。南公園は古巣だし、ド

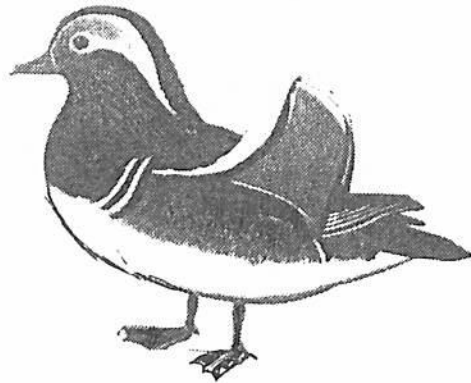
ングリ以外のえさももらえるが（アヒルのえさを、マガモと一緒に食べているのを見た）、人が近づかないかくれ場所も多い大谷池が気に入っているみたいだ。

カルガモと一緒に水浴びをしているのを見たが、カイツブリと同じように、長い間水にもぐっていた。何べんも繰り返した後、浮いている木に飛び上がって羽根をふるわしていたが、あんな水くぐりをするのを見たのは初めてだった。

子オシドリがほとんど親と同じ色に変わった十二月、いつ風切羽が三角に立つかと見ていたが、どうやら十三日ごろちらちらと三角が立ち始めた。しばらくして十九日、大谷池の方に行ってみてみる。いたいた、大谷池の東岸に三羽がそろっている。

風切羽が三角に立っているのははっきり分かる。しかも親子が順に並んでいる。

探鳥会に来た人が、動物園のオシドリとちがって野生のオシドリはこんなにきれいなものかと、いつまでも見ていました。



オシドリ

## でかけてみませんか 冬の大谷公園

若松東 斎藤かをる

日本野鳥の会が、毎年一月十五日を中心に全国一斉にガン・カモ調査を行います。

西三河野鳥の会会員も、手分けをして調べました。私も今年で五回目です。

つばさのある鳥なので、日、時によって数が変化しますが、次の表は十時から十一時までに調べたものです。

上地湿原は、近くに高層住宅が建ったので気にかけていましたが、去年とあまり変わりなくかわせみも二羽姿を見せ、ほっとしました。

### ● 大谷池は カルガモの池

二、三年前までは、下の池には少なかったのが、今では上の池と同じくらい泳いでいます。

グループが違うらしく、行ったり来たりは していないようです。



大谷池を泳ぐ水鳥たち

マガモやハシビロガモが時々まじっています。

奥山田池から、移って行った弱々しかったオシドリは、美しい雄若鳥となり、三羽の泳ぐ姿が見たくて、よく大谷池まで出かけて行きました。一月十三日に、オスが一羽増え、四羽で泳いでいるのを見た時は、いよいよ大谷池はカルガモとオシドリの池になるのか、と心はずみましたが、三日目にはいなくなり、親オシドリはまた南公園にもどってしまいました。

	奥山田池	大谷池	上地湿原	南公園	東楽園
オシドリ		1		2	
マガモ	1 2	2		4 0	7
カルガモ	5	1 1 5	1 0		1 7
コガモ	2		7 7		2
オナガガモ					1
ハシビロガモ	4 6				
ほかの水鳥					
カイツブリ		1		1	4
カワウ	1	1	1	1	2
コサギ		1		3	
アオサギ	1				
バン	1		2		2
カワセミ	1	2~4	2	2~4	2

それぞれの池で確認できた数 平成5年1月15日

残った若オシドリは、大谷橋の東側の下にある杭のあたりが好きなようでしたが、この二、三日見ないので気がかりです。ベアの相手を見つけて、来年も来てほしいと思います。

大谷公園は、池も美しいけれど、山も楽しいところです。

夏の展望台は見通しがきかず、おもしろくないけれど、今は冬木となり、北と西の方角は遠くまで眺められ、南は池に浮かぶ鳥を見ることができません。

東はすぐ目の前を木でじやまされてしまいました。

キャンプ場南の山には、丸太造りのミニアスレチックがあるけれど、小さいので山の雰囲気をごわさないのがうれしい。よごれ方が少ないのは、あまり利用されてはいないのかしら。たばこの吸いがらが散らばっているのは気になります。

「登ってみたいな。」と思うけれど、下りる時足をくじいても犬では助けてくれないしと、勇気が出ません。

登れないけれど、それに持たれて空を見ていると、いろいろな音や声が聞こえます。切れめなしに大谷橋を渡る車の音、家を建てている音、学校のチャイム、工場のサイレン、犬が走り回って落ち葉をふむ音。人の声は聞こえず、小鳥の音が聞こえてきます。

一月になって、七回ほど行ってみた大谷公園で見かけた鳥は、

池では、カルガモ、マガモ、ハシビロガモ、コガモ、オシドリ、カイツブリ、カワウ、コサギ。

岸や山では、ハクセキレイ、セグロセキレイ、キジバト、ヒヨドリ、ツグミ、エナガ、シジュウカラ、メジロ、

ホオジロ、カワラヒワ、スズメ、カケス、カラス。

その日その日で、見られる鳥は違うけれど、ヒヨドリやツグミ、カケスはいつも見られ、シジュウカラやメジロは、晴れた空をぼんやり見ていると、かわいい声が近づいてきて、目の前の木で、群れが一騒ぎして、また遠くへ行ってしまう。ツグミは、すぐかくれてしまうのに、シジュウカラは、自分から姿を見せに来てくれるので楽しい。

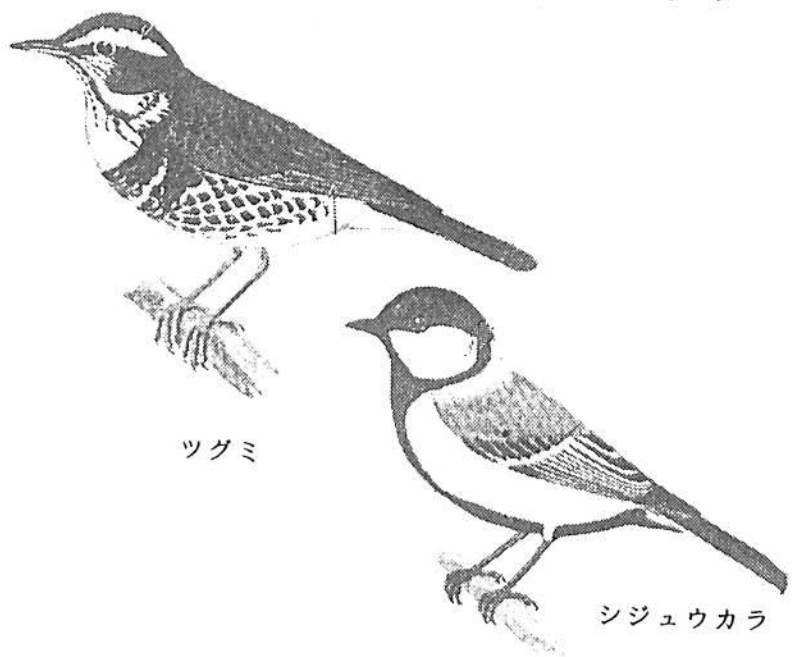
南公園・奥山田緑地・大谷公園と続く森を、小鳥たちは気ま

まに行き来しているのではないでしょう。山に気ままに入って行けないこの頃、大谷公園の山は、遊歩道ばかりでなく、けもの道の感じのところもあり、犬と共に楽しんでいるところがあります。

★ 工業高校の南の羽根大池は、この辺で一番大きく、葦も適当に茂り、道や人家に囲まれながら、人が近づきにくいせいか、数え切れないほどの水鳥がいます。

奥山田池のコサギも、移っていったようです。

東楽園に近い西南の岸と、西の土堤からは、よく見えます。





# 千年前の上地古窯跡群

（貴重な埋蔵文化財を追って）

松原 暁三

## 1、上地九区に二基を確認

昭和六十二年九月、岡崎市社会教育課荒井信貴主事のご指導を得て、登り窯跡を追って上地の山中を何度も歩いた記録をまとめました。題して「上地の山が呼んでいる」でした。

考古学の先輩や著作進行中の「岡崎市史」の記述を頼りにしながら、開発前の上地で試掘されたという登り窯跡の所在を求めて歩きました。平安時代といえますから、今から千年も前のことです。

その時の記録は、「ふるさと上地」（昭和六十三年三月発行）に掲載されていますのでご覧になった方もおられるかと思えます。

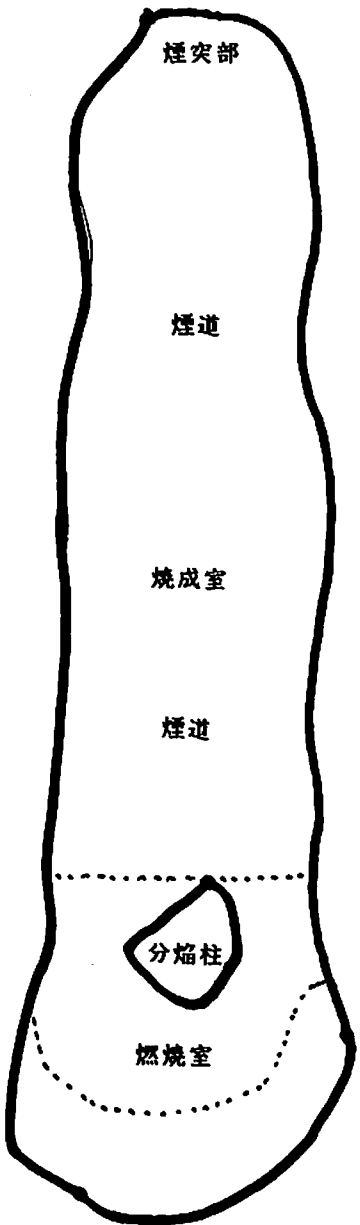
その後、学区内の宅地化や大谷公園の整備が急速に進展するなどの変化がありました。こうした状況の進展の中で、上地の埋蔵文化財保護の心情から、今日、改めて「窯跡」調査の必要を感じるようになりました。諸資料によれば、上地学区の登り窯跡は、九区内の大谷公園北の山中（堤ヶ入古窯）・勤労福祉会館南東の宅地（上天崎古窯）・奥山田池南の雑木林（下矢崎古窯）の三か所に確認されています。

以下は、窯跡について現在までに解明されている資料に基づいて、現地訪問しながらまとめたものであります。

## 2、「登り窯」とは

ここで言う「登り窯」とは、陶磁器を焼く窯の一つで山の斜面を利用して窯を築くものです。日本では最も古くから行われてきたものとされています。

構造的には、下方の一番手前が焚き口で、次の間は捨て間とか胴木間と呼ばれて燃焼を最も効果的な状態に保つ役割を果たしています。焼き物は第三室（焼成室）から並べていきます。そして、窯は下の室で使った火力の余熱が上の室まで及んでいくため大量に効率よく焼き上がるといふ利点があります。



登り窯略図（上矢崎古窯発掘写真参考）

### 3、幸田古窯跡群の一つとして上地に

「岡崎市南端の標高五十メートル丘陵南側斜面に構築されており、周辺には湿地帯の水田が入り込んでいる。この古窯は、額田郡幸田町の丘陵に分布するものと一つの群を形成していると考えられる。灰原を中心に調べた結果、焼成室と考えられる遺構を確認することができた。しかし、確認できたのは床面のみで側壁は認められなかった。

焼成室は約三十度の傾斜角度で上昇し、上部は水平となる。焼成室の上端は、約五十度の急角度で再び上り、約四十七センチメートルの壁状をなし、その上部は煙道部と考えられる床面となる。」

これは、昭和三十六年十一月五日から七日にかけて、岡崎文化財研究会など七団体が行った「堤ヶ入古窯」発掘調査記録の一節です。ここで指摘されているように、これから紹介していく「上地古窯跡」は「幸田古窯群」の一つとして位置づけられているものです。

出土した遺物は、碗・皿・壺・甕（かめ）・焼台などでしたが、いずれも平安時代のもものと鑑定されています。

さて、上地に三基確認されている「登り窯」跡の紹介に移りましょう。

#### 一、堤ヶ入古窯

大谷池の北山中の標高約五十メートルの丘陵斜面にあり、旧地籍が上地町字堤ヶ入であったため「堤ヶ入古窯」（つつみがいりこよう）と呼ばれています。

遺物から、十世紀前半の窯跡とされています。

#### 二、上矢崎古窯

「堤ヶ入古窯」の北方約二百四十メートルの丘陵南西斜面に築かれ、旧地籍が上地町字上矢崎であったため、「上

矢崎古窯」（かみやさきこ

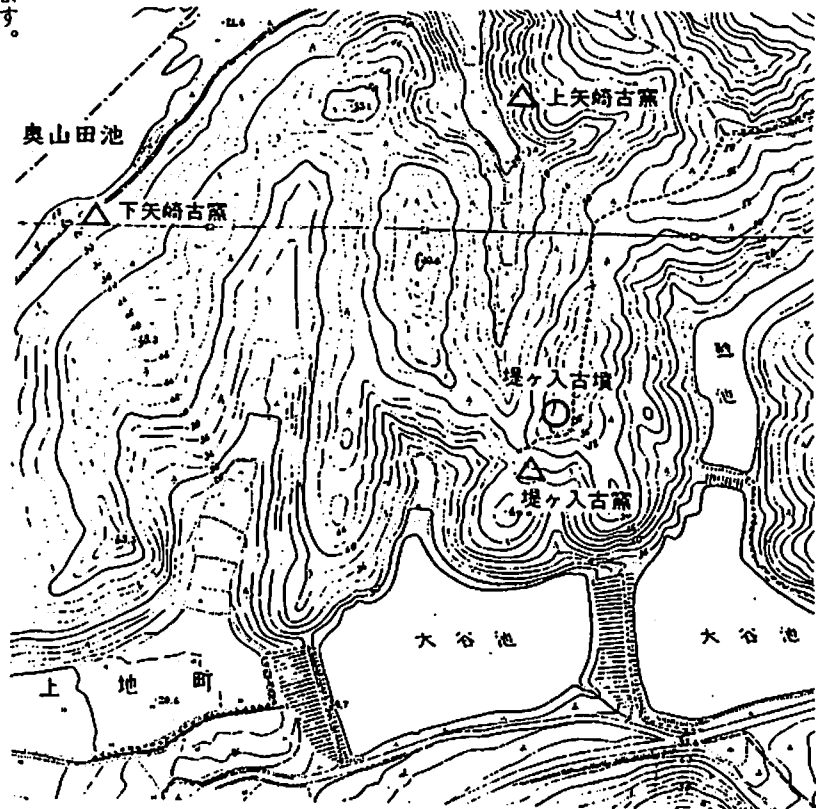
よう）と呼ばれています。

遺物から、「堤ヶ入古窯」

と同様に十世紀前半の窯跡とされています。

#### 三、下矢崎古窯

「堤ヶ入古窯」の西南西約三百メートルの丘陵北西斜面（奥山田池南斜面の雑木林から池中）にあり、旧地籍が上地町字下矢崎であったため「下矢崎古窯」（しもやさきこよう）と呼ばれています。遺物から、九世紀前半の窯跡とされています。ほとんどが池の中に埋没していると思われ、調査は極めて困難が予想されています。



上地古窯跡群位置図 (1:5,000)

#### 4、堤ヶケ1人土古窯跡

以下に、堤ヶケ入古窯から順を追って上地三基の古窯跡群を紹介していきます。

とうとう、勤労福祉会館を初め若松方面が一望できる頂上に立ってしまいました。

「確かにこの辺りだったと思うんですが……。」

鈴木さん（初代上地学区社教委員長鈴木勲氏）が、やや困惑気味に探し回って下さいます。と、しばらくして十一時三十分。

「あつた！これだ！先生！」

鈴木さんの叫びにも似た感嘆の声をたよりに頂上から南に下り始めました。落ち葉を五センチ程手で取り除いてみました。辺り一面から出てきます。焼台・窯の壁と思われる焼けた土片や壺（かめ）の破片……。

千年を越える過去の土地が顔を現わしました。感激の一瞬でした。

「これは間違いない窯の跡です。これだけ、焼台がごろごろ出てくるのを見れば、はっきりしています。」

窯跡に立った荒井主事（現在は市教委社会教育課文化係勤務）が確認しました。

これは、「ふるさと上地」（昭和六十三年三月発行）に掲載された「上地の山が呼んでいる」の一節です。嶋田前校長を初め当時の上地小学校職員と共に、大谷の山中を探索して発見した「窯跡」取材の記録でもあります。その感激が生々しく思い出されます。

さて、この堤ヶケ入古窯は昭和三十六年の一月に前述の岡崎文化財研究会が中心になって発掘調査をしましたが、窯体の全容を把握するまでにはいきませんでした。しかし、次に紹介するような陶器がいくつも発見されました。

出土した遺物は、すべて灰釉陶器（かいゆうとうき）木材を燃した時に出る灰を水で溶かして作った釉薬をつけて焼いた陶器）です。

発掘記録を見てみましょう。

碗……口径が十二センチメートル、器高が三、二センチメートル、六センチメートルの碗です。（次ページ遺物図11）

内底面には、いくつか重ね焼きした「焼痕」があり、外底面にはへら削りの痕も残っています。釉薬が器上半の内外面にどっぴりと漬けがけされ、いずれも灰釉陶器独特の黄緑色か黄褐色を呈しています。

皿……口径が十二、一センチメートル、八センチメートル、器高が二、四センチメートル、二、九センチメートルの皿です。（次ページ遺物図12、16）

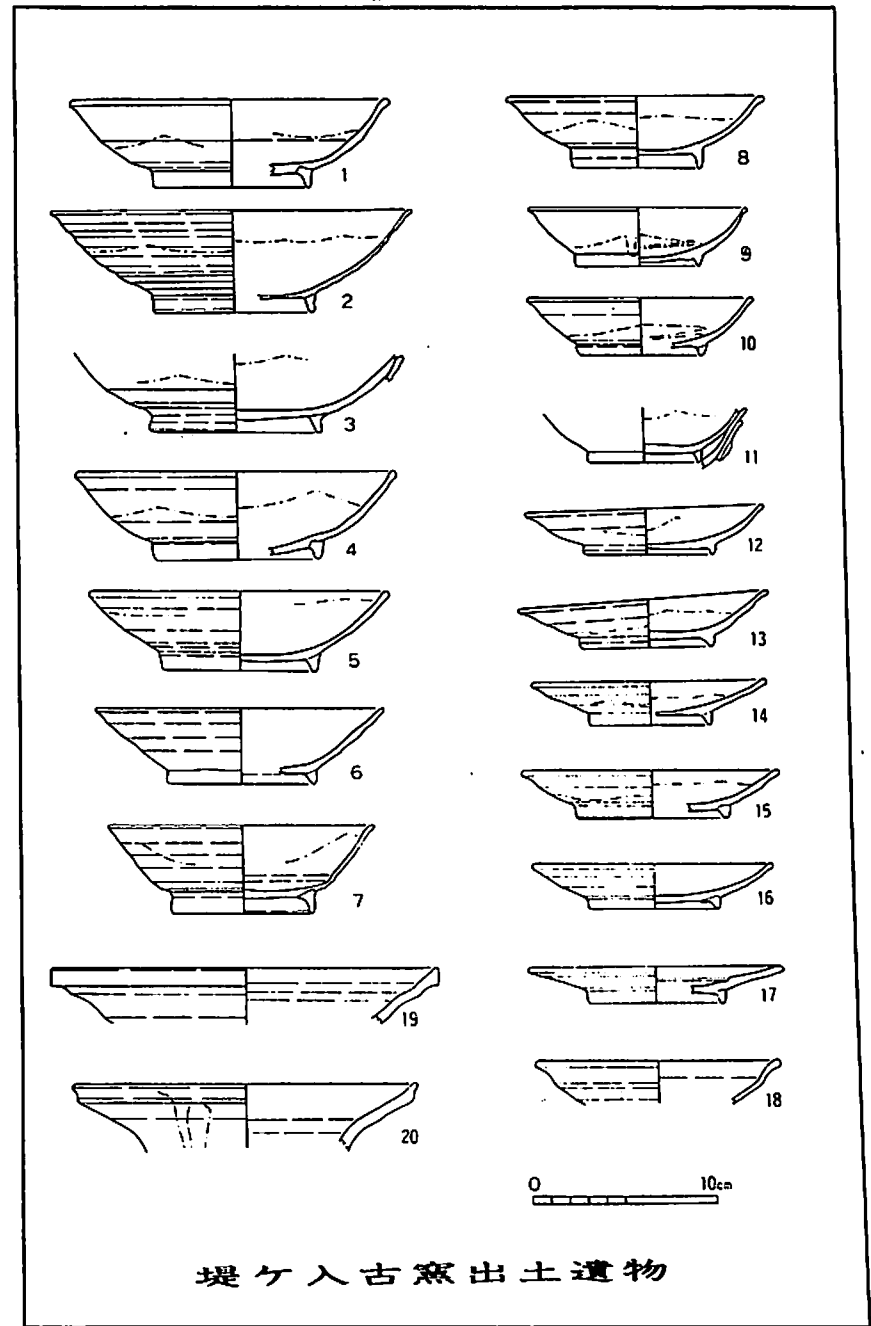
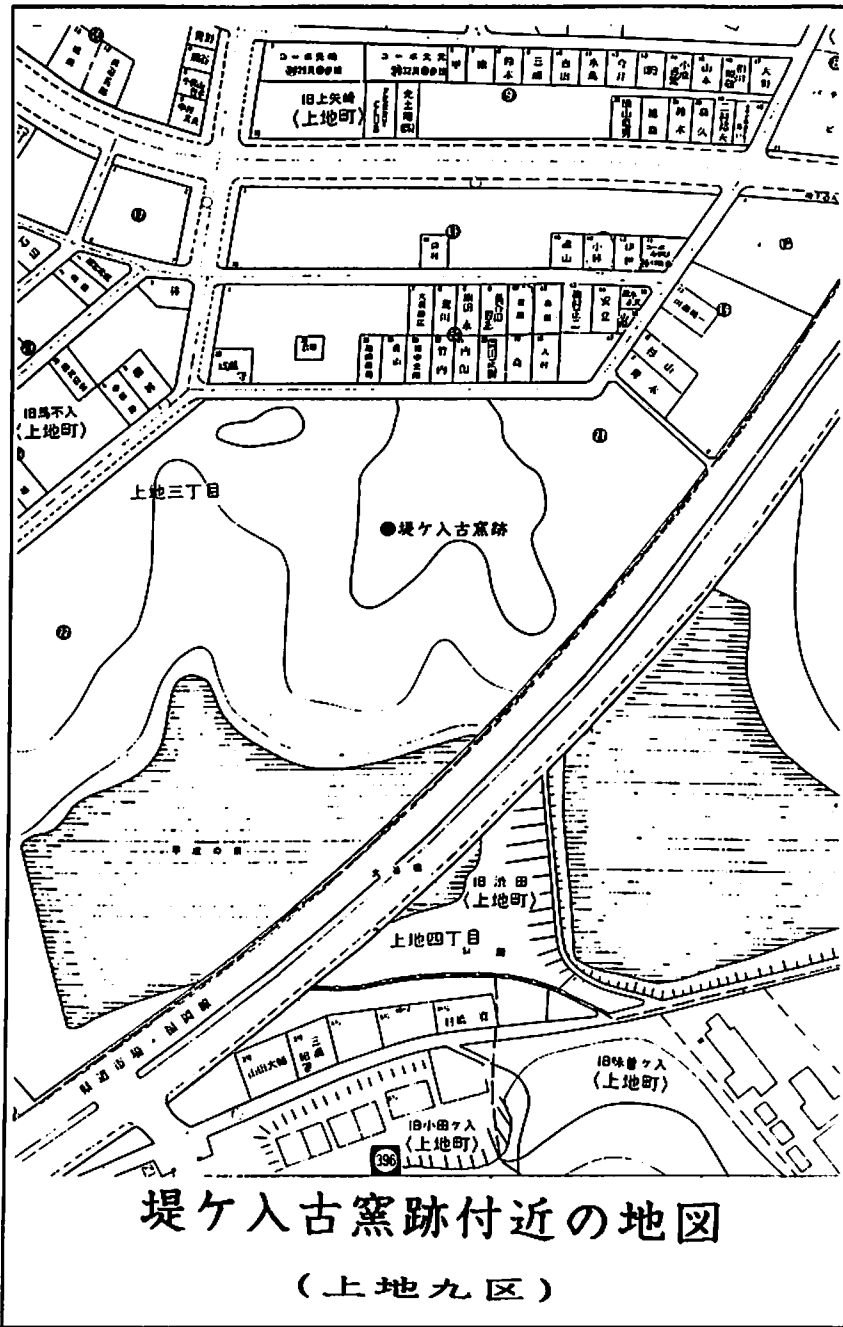
内底面には、碗と同様にいくつか重ね焼きした「焼痕」があり、外底面にはへら削りがありますが、糸切痕の残っている物もあります。

釉薬は、漬けがけで口縁部の内外面に施されて黄緑色か白灰色を呈しています。

広口壺……口縁部だけの破片しか発見されませんでしたので、口径は不明ですが推定十七、八センチメートル、二十センチメートルとされています。（次ページ遺物図19、20）

釉薬は、内外面に施されて淡緑色を呈しています。

この他に段皿や折縁皿も発見されていますが、次号に予定している「上矢崎古窯」の項で記します。



平成五年二月八日（火）の午後でした。授業が終わってから長坂信一校務主任と竹内孝之校務主任補佐の先生と三人で「堤ヶ入古窯跡」に出かけてみました。

私にとっては、もう現地入りして四年余りを経過しているため目印にと木の枝に付けておいたハンカチもなくなっていました。山中を地図を片手に探して歩きました。しかし、なかなか窯跡が見つかりません。

「もう少し向こうの山ではないでしょうか。」

「この地図の大谷橋を基準にしても、もっと東では。」

と、長坂・竹内両先生の助言を得ながら、最初に入った山より東を目指して行きました。

やっぱり、この日も「上地の山が呼んでいる」のです。千年前の上地灰釉陶器は私たちを待っていてくれたのです。

夏のやぶ蚊に悩まされながら探し歩いた四年前の記憶が一気によみがえり、確信にも似た思いで数センチ枯れ枝で掘ってみました。間もなく、焼台五個と皿の破片一つを発見。出かける時に用意しておいた「堤ヶ入古窯」標示板を立て、四十分余の探索を終わりました。



堤ヶ入古窯跡で焼台・小皿の破片を採集

## 千年前の上地古窯跡群

（貴重な埋蔵文化財を追って）その2

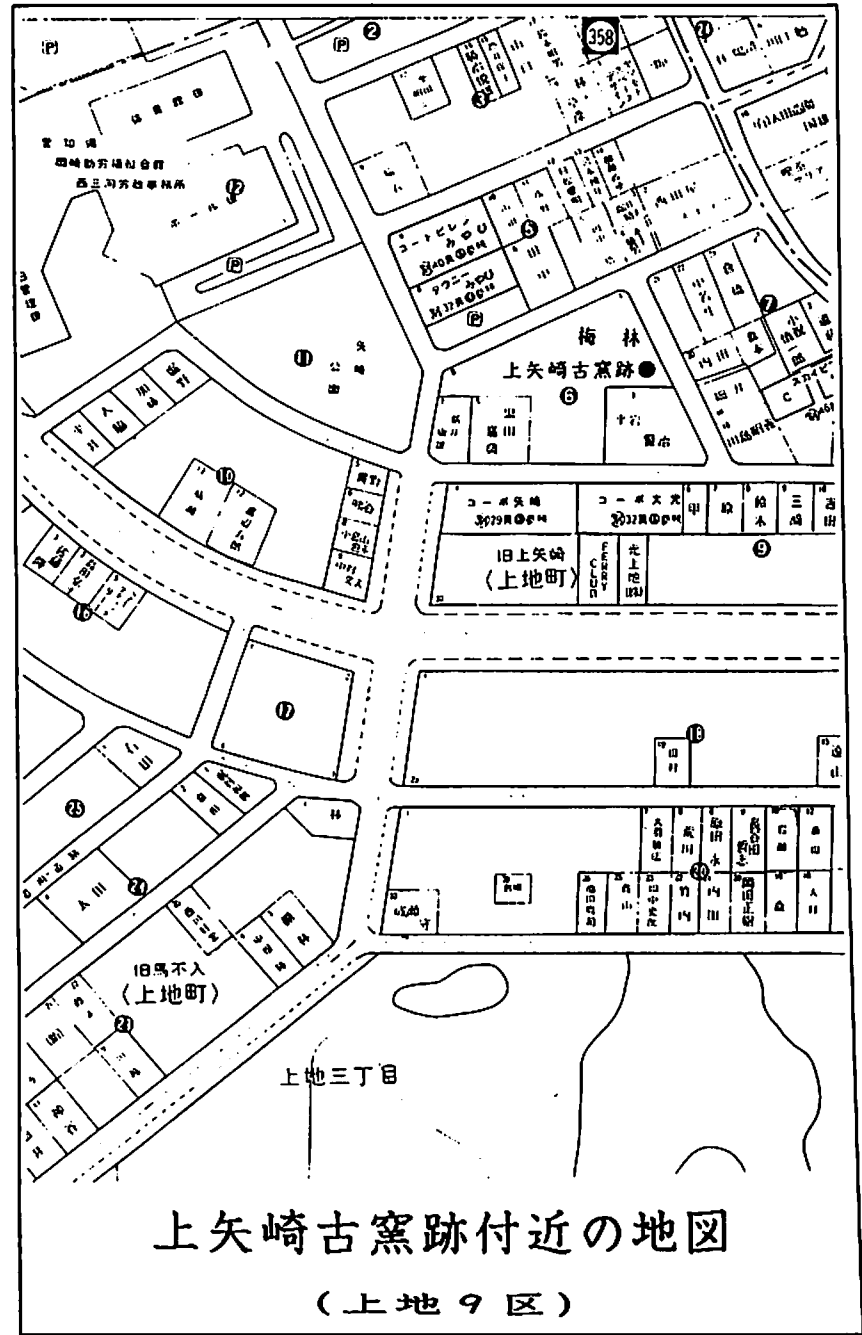
松原 暁三

### 5、上地大崎古窯跡

上地崎古窯は昭和三十六年の堤ヶ入古窯発掘調査が終わると間もなく、故岩城留吉氏（ご遺族は羽根町大池六十五―九に在住）によって発見されました。上地地区の区画整理事業工事が開始されるに当たって、昭和五十三年の二月から三月にかけて調査が実施されました。この区域は「上地第二特定土地区画整理組合」に属していたため、調査はこの組合の委託という形で進められました。当時岡崎市の区画整理指導課長だった大河内喜代一氏（福岡町山下十六番地）は、この二月にお宅を訪問した際、その頃の事情を次のように語って下さいました。

「上地の山を崩す造成工事の真っ最中でした。ブルドーザーやユンボを総動員して毎日急ピッチの作業が続いていました。窯跡のあったという周辺から、焼台がごろごろと出てきてびっくりしました。ここは、市の遺跡簿にも載っていないなかったので、窯跡があるということは全く誰も知りませんでした。しかし、そのまま工事を進めるわけにはいかず、工事をストップして、研究員の方たちにより二か月ぐらいの調査が行われました。数百万円の調査費を投入する大がかりなもので、発掘関係者は羽根町の旅館に宿泊しておられました。この窯跡発見で造成工事が大幅に遅れてしまい、正直言って大変困りました。発掘調査後は、工事の遅れを取り戻すため突貫工事でした。」

関係者の方々のこうした適切な対処によって、区画整理事業の計画的な推進と上地の埋蔵文化財保護が、両立・調整されて



上矢崎古窯跡付近の地図

(上地9区)

いったのです。

以下は、当時の調査と現在までに解明されてきた諸資料に基づいて、現地訪問も合わせてまとめたものです。

窯体…：焚き口は西南西に向けて構築された半地下式の登り窯です。天井の部分はすべて崩壊していましたが、

側壁は上端近くまで残っているところが多くありました。窯体の全長は五、三メートルで燃焼室と焼成室は分焰柱によって区画されています。そして、この分焰柱は高さが四十センチメートルで基底の長径が五十五センチメートル、短径が四十五センチメートル、上端の径は三十センチメートルです。

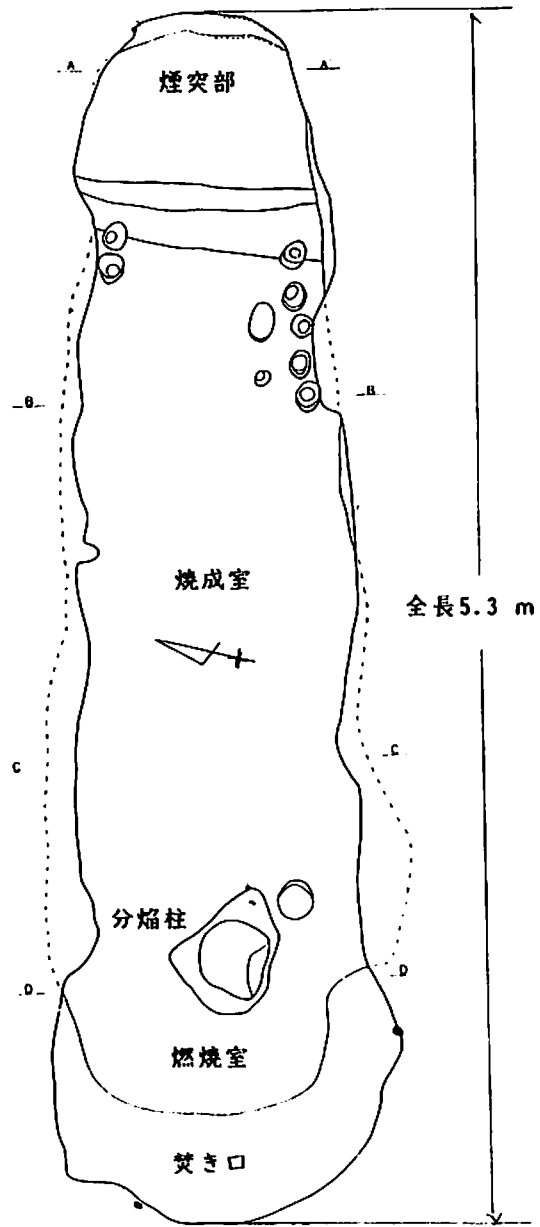
燃焼室の長さは一、一メートルで分焰柱付近の幅は一、二メートル、側壁の高さは一メートルです。また焼成室の長さは四、一メートルで最大幅は一、五メートルです。傾斜角は二十度から四十度となっています。煙道部は、赤く焼けた床面の痕跡だけが確認されました。

灰原…：焚き口から下方の斜面に広がり、その範囲は東西十五メートル、南北六、五メートルです。灰層の厚さは中央部で一、二メートル末端部で二十センチメートル前後となっています。また、焚き口の南南西側からは、長さ一、九メートルから二十センチメートルの溝状の遺溝を確認できました。これは、登り窯の排水溝と考えられます。次に、発掘された灰釉陶器の主なものを記してみます。

碗・大型碗・皿・段皿・耳皿・拓・長頸壺・小型長頸壺・こしき・蓋などが多数発掘され、いずれも十世紀前半のものとして鑑定されています。また、釉薬の施されていない須恵器もあり、発掘量は全体の約五パーセントを占めています。この他に、左図のように水煙や窯道具類も発掘されています。

水煙…：厚さ二、二センチメートルから三、五センチメー

トルの板に弧状の鋭い切り込みが入った水煙（寺



上矢崎古窯窯体図

見ると、当時の焼き物師が土をつかんだ指のあとが、はっきりと残っています。中指か人差し指なのでしょう。千年前、ここ上地、大谷の山中で窯の煙にむせびながら、汗を流した人たちの姿を偲ぶことができます。

これと同様の焼台は堤ヶ入古窯で今も、いくつか発見することができます。かたまりをよく上地小学校の校長室にも、私たちが堤ヶ入古窯跡で採集してきた焼台が数個保存されています。

たまりですが、八一二個確認されています。

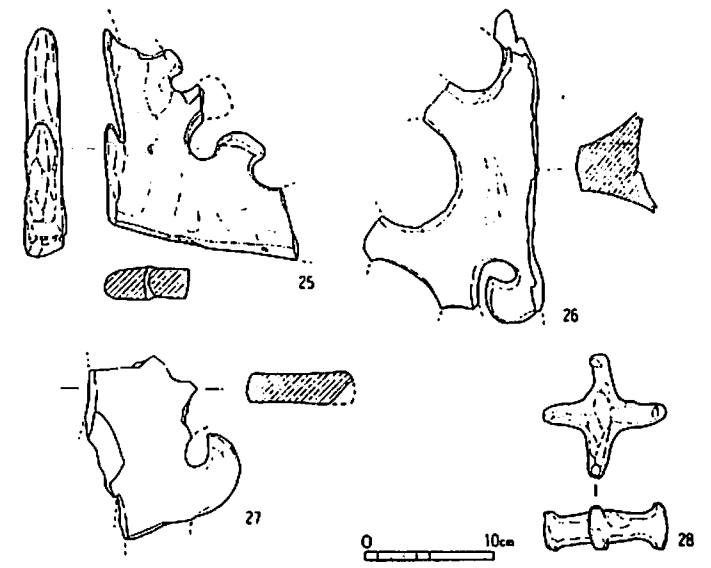
焼台：…山の斜面を使って焼くため、焼き物が下方に転げ落ちないように、低い方に置くこぶし大の土のか

メートルの大型トチで灰白色です。

の高さが二、九センチメートルから三、四センチメートルの四又トチ（陶器を重ね焼きする時に使う道具）が、焚き口部の床面から一つだけ出土しました。一辺の長さが九、六センチメートル、脚端部の高さが二、九センチメートルから三、四センチメートルの大型トチで灰白色です。

窯道具類：28の四又トチ（陶器を重ね焼きする時に使う道具）が、焚き口部の床面から一つだけ出土しました。

の塔の上部にある火焔形の装飾）も発掘されています。25・26共に淡灰色の素地に黄緑色の灰釉がハケ塗りされています。これによって、当時すでにこの近辺に有力な寺院が存在したことが予測されます。陶器の水煙は、全国的にも二、三例しか発掘されていないので、貴重なものです。この塔をいただいた寺院が、どこのものかも関心と呼ぶところです。



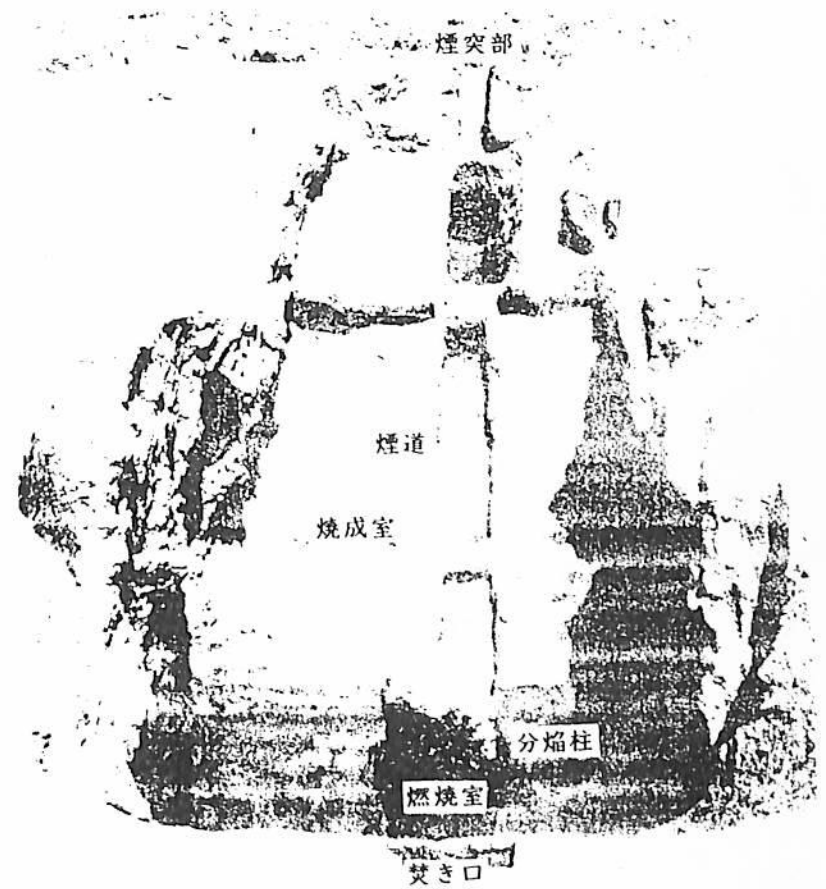
上矢崎古窯発掘「水煙」・「四又トチ」図

6、下矢崎十古窯跡

下矢崎古窯は、上矢崎古窯同様に故岩城留吉氏によって発見され、たくさんの灰釉陶器と窯道具が採集されました。しかし場所が奥山田池のほとりから池中に広がっていることもあってか、今日まで本格的な調査は行われていません。

昭和六十二年に、私も柴田社教委員長さんや嶋田稔前校長・青木純先生らと現地を何度も訪ねて探索しましたが、一片のかけらすら発見することができませんでした。

大量のやぶ蚊に急襲されたことだけが思い出されます。



上矢崎古窯発掘現場写真（柴田勝社教委員長昭和53年撮影）



下矢崎古窯跡付近の地図  
(上地9区)



岡崎市史によれば、「灰原の末端は、谷頭部をせき止めてつくられた奥山田池内に広がっており、岸辺の灰原から多量の灰釉陶器の薄片と窯道具の三叉トチが、岩城留吉氏らによって採集されている。本古窯は窯体も灰原も未調査であるが、三叉トチの存在からも見て、灰釉陶器第一型式（九世紀前半）頃の窯跡と推定される。」とあります。

こんな事情から、ぜひ岩城留吉氏のご遺族にお目にかかってみたいと思っていました。昨年の晩秋、この奥山田池にシラサギなどの探鳥をかねて山野草の散策にいらっしゃった奥様（岩城ふさ子様）においき会いしたことを思い出し、早速お宅をお訪ねしてみました。

二月十七日（水）に、教務主任の菅沼先生と一緒にふさ子様のご自宅を訪ねました。私たちの突然の訪問にも拘らず、七十八才で亡くなられたご主人が上地周辺の遺物調査に没頭されていた当時の模様をお話して下さいました。ご存じの方も多いかと思いますが、岩城留吉氏は初代の岡崎城西高校長でもあり、確固とした信念による学校経営は市の内外から大きな関心を呼んでいました。

では、早速奥様の回顧談をご紹介します。

主人は、教職中から「ものに憑かれたように」考古学の分野に非常な関心を持っていました。暇さえあれば、岡崎市はもちろん県下の各地を体力の限界まで歩き回っていました。上地は、自宅からも近いということもあって、奥山田池にも、上矢崎にも堤ヶ入にも何度も足を運びました。私は、直接考古学に関心もなかったのですが、主人が、一緒に来るように言いましたので同行しました。

堤ヶ入の山の中では、大きな石をいくつも発見しました。古墳ですね。窯跡から出てきた「馬の爪」（馬爪型焼

台）を見て、主人が「これはなあ、焼き物の下に敷くために、夫婦が力を合わせて土だんごを作った指のあとなんだよ」と話してくれました。

奥山田池（下矢崎古窯）では、池の中まで入って行って、ザルですくったりしました。当時の池より今は小さくなってしまっているのですが、その場所がはっきり言えませんが、勤労福祉会館寄りの南東の端のところでした。葦がいっぱい生えているところですよ。

皿だとか壺、馬の爪、トチ、釉薬をつけてない須恵器等が、ダンボール箱一杯もありましたでしょうか。それらは、主人が亡くなってから間もなく、岡崎市の郷土館に全部寄付してしまいました。

でも、あんまりたくさん採集すると、「盗掘」になりかねませんので、それ以上の発掘はしませんでした。

テーブルの上に並べて下さった遺物を前に、お話が途切れなく続きました。下の写真は、お許しを得て菅沼先生が撮影させて頂いた「千年前の上地の顔」です。



## 7、上地古窯跡群の保存をめぐる

ここまで、堤ヶ入古窯は大谷公園の山中に埋もれ、上矢崎古窯は宅地化のため滅失、下矢崎古窯は奥山田池に埋没という上地学区古窯跡群の実態を記してきました。市教委社会教育課文化係の荒井主事が、一月二十日に来校された折、学区諸団体の皆様に前にこんなふうに語られたのを思い出します。

遺跡の発掘は、結局その破壊に通じるということを認識しなければなりません。窯跡を発掘して、その全容が浮かび上がったとしても、調査をしたままに放置すれば、それは時の経過と共に滅失していく運命にあります。窯体を樹脂で覆う等の加工をしても、風雨にさらし続けられれば、汚れ、ひび割れ、変色などが進行していくでしょう。風雨を遮断するよう屋根をかぶせ、壁で囲んだとしても、温度や湿度を適切に保たなければ、カビの発生を招きかねません。全面ガラス張りのコンピューター設置するなど大掛かりで科学的な管理をしなければ、折角の窯跡も、外から見ることができず、また保存もできないこととなります。ですから、遺跡の保存は、発掘調査に慎重を期さなければ、調査者の善意があっても結局のところ破壊に通じることになってしまいます。

埋蔵文化財の調査と保護についての責任ある、大きな視野を感じさせられます。現在進行中の竜泉寺町の松本古窯跡発掘調査でも、こうした観点から「破壊を伴わないレーダー探索などの近代的な方法が取られている」とのことです。この方法でも、かなり確度の高い調査が可能になっているのが現状のようです。「一度掘ってしまつたら、再び現状に戻らない」との、荒井主事の言葉が重く響きます。

この日、同席された諸団体の皆さんも、学区内の古窯保存のあり方について、率直な発言をされています。渡辺五郎市議会議員……堤ヶ入古窯と上矢崎古窯の、両者共に再現保存できれば一番好ましい。よく似た登り窯を作って焼いてみるのも、夢があつていいのではないかと。

成瀬司学区総代会長……私たちが子供の頃から、この上地で育った者でも、こうした古窯跡の存在を知らない人が多いのではないかと。ぜひ、慎重にしかも大切に保存していかなければと痛感する。さし当たつて、窯跡の現在地に看板表示をすることなど意味があると思う。

柴田勝学区社教委員長……今日の荒井主事さんのお話を聞いて、昭和五十三年の上矢崎古窯発掘調査を思い出しています。発掘現場写真を撮った者の一人として、上地学区の目を見張るような発展に感慨無量です。松本古窯発掘調査の教訓を生かした「調査・保存」を考えていきたい。

宇井均PTA会長……私は、今日初めて詳しく知り、上地の歴史の重みをしみじみ感激しています。子供たちと、上地古窯のミニチュア作りに挑戦してみるのも夢があつていいと思う。

この日以後、渡辺議員さんや成瀬総代会長さん・柴田社教委員長さん・宇井PTA会長さんも岡崎市公園緑地課を訪ね、案内標示板の設置などの要請活動を開始されています。

私たち学校職員も、こうした学区の皆さんや岡崎市関係機関の方々と共に、上地古窯群の再調査、学区への周知・保存などについて適切な方策を探っていかなければと思います。

その場合、遺跡の本当の意味での保存は、「できるだけ、そのままの状態を保つこと」で、発掘調査の技術の進歩を待つて破壊につながらない方法で調査すること（荒井主事）を基本にしなければいけないのではないのでしょうか。こんな意味からも、学区諸団体の皆さんのおっしゃるように、当面次のようなことが可能だと思います。

- 1、上地古窯跡群の再調査を継続し、その内容を学区の皆さんにお知らせしていく。その際、堤ヶ入古墳と上地向山古墳についても調査の対象とする。
- 2、上地古窯跡群や古墳については、当面は現状のままの保存をし、関係方面に「破壊につながらない」発掘調査を働きかけていく。
- 3、岡崎市公園緑地課を初め埋蔵文化財保護に関する諸機関に、文化財の存在と歴史的な意義を示す看板表示の設置を働きかけていく。
- 4、窯のミニチュアによる再現や灰釉陶器づくりなど、学校や地域で、できることを手がけていく。
- 5、その他、上地学区の埋蔵文化財保護のための諸活動を推進していく。

短い紙面で、多くの内容にふれたため、読者の皆様にご迷惑をおかけしたと思います。皆様と共に今後の研究成果を改めてご紹介する機会をもてたらと念じつつ……。



## 二、校長通信